
アイドル探偵 1 「気のきいた殺人」編

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドル探偵 1 「気のきいた殺人」編

【Nコード】

N7191J

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

駆け出しアイドル・白木寿々菜と、トップアイドル・岩城和彦のドタバタ探偵シリーズ第1弾！

和彦のマネージャーが殺された！怪しい人物はどう考えても1人しかいないのだが、その人物にはアリバイが・・・

笑いあり、涙あり・・・いや、涙は無しの、コメディーサスペンスです！

第1話 夢の共演！？

台本を持つ寿々菜^{すずな}の手が震えた。

――嘘。

これは夢だ。

夢に違いない。

だって、本当に小さい頃からの「夢」だったんだから！

「スウ。ちよい役だけど頑張れよ」

ちよい役だなんてことはどうでもいい！
通行人だって、犬だって、電信柱だって、木だって、岩だって、
なんでもやる！

とは、社長にはさすがに言えない。

寿々菜はニツコリと微笑んで、

「はい、頑張ります」とだけ答えた。

「やったあーーーー！！！！」

だが、堪えに堪えていた喜びの悲鳴は、
事務所を出たところで爆発した。

来た！

ついにこの日が来た！！

台本の1ページ目をめくってみる。

そこには2時間物のサスペンスドラマの配役が書かれていた。

駆け出しのアイドルとしては、ヒーローやヒロインが誰かなんてことより、

例え最後の最後だとしても、真っ先に自分の名前を探すだろう。

だが、寿々菜の目は、一番最初の行・・・つまり、主人公の名前に釘付けになった。

『みそのえいじ御園英志・・・KAZU』

その文字を指でそっと触ってみる。

夢にまで見たKAZUとの共演（？）。

おめでたい寿々菜の頭の中は既にクランクインしていた。

KAZUは、門野プロダクションという芸能プロダクションが主催したオーディションでグランプリを取り、

高校1年生の時、芸能界デビューした。

門野プロダクションはワンマン社長のもと、細々とやっているプロダクションで、

そのオーディションも所属タレントも、それまで脚光を浴びることはなかった。

しかし、そのルックスの良さと才能で、KAZUは瞬く間にトップアイドルの座を物にした。

当時、小学生だった寿々菜も他の女の子達同様、すっかりKAZUの虜になった。

だが、寿々菜はそれだけでは満足しなかった。

今のままじゃ、私はKAZUにとって、ファンの1人に過ぎない。そもそも、KAZUは私の存在すら知らない。

そんなのイヤだ！

KAZUと同じ場所に行きたい！

呆れる両親と姉をものともせず、

寿々菜は履歴書を持って門野プロダクションの門を叩いた。

・・・が。

世の中そんなに甘くない。

いくら門野プロダクションが弱小とは言え、

ちよつとかわいいかな、と言う程度の何の取り得もない女の子を雇うようなボランティア精神は持ち合わせていなかった。

しかし、寿々菜は諦めなかった。

そして2年以上もかけて、ついに門野プロダクション社長のダルマ・

・・・ではない、

かどのまこし
門野誠を口説き落とした。

もつとも、「ダイヤの原石は見逃さない」がモットーの門野社長が
らすれば、

「まあ、たまにはイミテーションも悪くない」と言ったところだが。

とにかく、こうして「スウ」こと白木^{あけい}寿々菜が門野プロダクション
所属の、

一応「アイドル」になったのが1年と少し前。
それ以来、じみーに仕事をこなしてきた。

ちなみに一番多い仕事は広告のモデル。

それも老眼鏡が必要な方には見つけて頂けないサイズの物ばかりだ。

それでも寿々菜は頑張った。

KAZU目当てで飛び込んだ芸能界ではあるが、
せっかく雇ってくれている門野社長のためにも、少しでもいい仕事
がしたかった。

そして・・・ついにこの日がやってきた。

ドラマデビュー、しかも、あのKAZUが主人公の「御園探偵シリ
ーズ」！

寿々菜はKAZUが出演している番組は欠かさず見ているが、
中でもKAZU扮する御園英志が活躍するこの「御園探偵シリーズ」
は大のお気に入りだ。

自分がそれに出演できるなんて、信じられない！

寿々菜は「早速お母さんに電話しなきゃ」と、鼻歌を歌いながら家

路についた。

同じ事務所とは言え、トップアイドルと駆け出しアイドルでは、顔を合わせることはほとんどない。事実、寿々菜もまだ生KAZUとは会ったことがなかった。

だから寿々菜は、クランクイン（本物の）を、指折り数えて待つことになったのだが、皮肉なもので、確実に会えるとなると、バツタリ出くわすという偶然に見舞われるもので・・・

「え！？KAZUが！？」

「ええ。このホテルの一室でインタビューらしいわよ」

マネージャーの八代景子^{やつしろけいこ}が字で埋め尽くされたスケジュール帳から目を話さずに言った。

誤解のないように言っておくが、このスケジュール帳に書かれている仕事は、

全部が全部、寿々菜の仕事と言う訳ではない。

景子は寿々菜のような仕事の少ない何人もの芸能人の掛け持ちマネージャーだ。

寿々菜の仕事など、このスケジュール帳から消えたところで、その密度に大した影響はない。

う、運命だ！

都心のホテルならまだしも、こんな郊外の小さなホテルで・・・！

「ど、どの部屋ですか！？」

「さあ、部屋までは聞いてないわ。あ、そっか。スウはK A Z Uのファンなんだっけ？」

「はい！」

無邪気に目を輝かせる寿々菜に景子は思わず苦笑した。

まだ高校１年生で芸能暦も浅い寿々菜にはわからないが、芸能界には、特にトップアイドルと呼ばれる人種には、少なからず秘密がある。

だが、それを寿々菜に暴露するほどに景子は人が悪くない。

景子はこの道１５年のベテランで、今年３７歳になるが、その容姿はそんじょそこのアイドルに負けない。

テレビ局など歩いていると、芸能人に間違われることもしばしばだ。

仕事が忙しいあまり、まだ独身で若々しく見えるせいもある。

「会いたい？」

「会いたい！」

「ふふ。じゃあ、ちょっと待って。真紀子さんに電話してみるわ」

言い終わらないうちに、景子の手は携帯の通話ボタンを押していた。真紀子とは・・・フルネームは水沼真紀子みずぬま まきこと言う・・・K A Z Uの

専属マネージャーである。

年は景子と同じで既に結婚しているが、まだ子供はない。少々神経質な性格が玉に傷ではあるが、それくらいでなければマネージャーなど務まらないのかもしれない。

「あ、真紀子さん？今いい？私、スウと一緒に、Tホテルのロビーにいるんだけど・・・」

ううん、エキストラの仕事・・・うん、KAZUって時間あるかしら？ええ、1、2分でいいわ」

携帯を切ると、景子は寿々菜に微笑みかけた。

「部屋まで来てくれるなら、挨拶くらいはできるって」

や、や、や、やった！！！！

寿々菜は景子に礼を言つと、一目散にトイレへ駆け込み、全身をチェックした。

160センチという芸能人としては小柄過ぎる身長はどうにもならないが、

ボブのクリンとしたカールと化粧を直すことくらいはできる。

なんといってもKAZUとの初対面だ。

少しでもかわいくしていきたい。

Cカップの胸もどうにもならない・・・

もうちょっとウエストのキツイ服を着てくるんだった。

そしたら少しでも胸が大きく見えるのに。

寿々菜は、昨日見た週刊誌を思い出した。

KAZUのスクランダルが掲載されている。

こんなことは日常茶飯事で、それはKAZUの人氣に全く影響しない。

だが、やはりいちファンとして、

憧れのKAZUがナイスバディな美女と一緒にいる写真というのは、面白くない。

だけど私は知っている（みんな知ってるけど）。

本当はKAZUはとっても一途で、未だに初恋の人を忘れられずにいる。

ブログにそう書いてあったもん。

今、色んな女の人と遊んでるのは、その人を忘れるためなんだから！

寿々菜はグロスを塗ると、勇ましい足取りでトイレを後にした。

第2話 事件発生

真紀子の指定通り寿々菜と景子の二人は、2時に2303室へ向かった。

が、ノックをしても一向に返事がない。

もしインタビュー中だとしても、無反応というのはおかしい。

寿々菜と景子は顔を見合わせた。

「もしかして、インタビューが早く終わってもう帰っちゃったのかな・・・」

寿々菜はガツカリしたが、景子は首を振った。

「真紀子さんが何の連絡もよこさずに、勝手に帰るなんてことありえないわ。」

それにインタビューは2時半からだし・・・もしかしたら、私が部屋を聞き間違えたのかも」

そう言つて、再び真紀子に電話を試みる。

すると部屋の中から、かすかにピピピという着信音が聞こえた。

「中にいるみたいね。真紀子さん！」

景子がドアをドンドンと叩いたが、出てくる気配はない。

これは、やはりおかしい。

景子はホテルマンを捕まえ、マスターキーで2303号室の扉を開けてもらった。

中を見て、寿々菜は驚いた。

これ、本当にホテル？

どっかの高級マンションなんじゃない？

寿々菜がそう思ったのも無理はない。

そこはスイートルームだったのだ。

だが、その寝室で寿々菜は更に驚くことになる。

「・・・！！！！け、け、け！ま、ま、ま！！！！」

トイレや浴室を探してた景子が、意味不明な寿々菜の叫び声を聞きつけて、

寝室に飛び込んできた。

「スウ！どうし・・・」

だが、景子の声もそこで途絶えた。

掛け布団がめくれ上がったベッドの上に、胸にナイフを突き立てた女が倒れていたのだ。

ドラマじゃあるまいし。

寿々菜は、すっかり狭くなってしまった2303室の隅で景子と手を握り合い、

青くなつてちょこんと立っていた。

いや、2303室の面積が小さくなつた訳ではない。

人口密度が急激に上がったのだ。

テレビの中しかお目にかかったことのない鑑識の人たちが、所狭しと動き回っている。

いかにも「刑事です」という男達も何人かいた。

こんなのドラマの中でしかありえない・・・

ううん、今度のドラマだって、そんな重要な役じゃないのに！

現実の世界で重要参考人になつてる場合じゃないわ！

だが、寿々菜の心の叫びも虚しく、寿々菜と景子は間違いなく重要参考人であつた。

なんと言つても、女の最後の声を聞いたのは景子で、第一発見者は寿々菜である。

若い優男が緊張した面持ちで、寿々菜と景子の方へやってきた。

「こんにちは。私、W署の武上^{たけがみ}と申します」

武上は二人に警察手帳を開いて見せた。

寿々菜は、こんな状況だからそんなことしなくても警察の人間だとわかりきっているのに、

真面目にそんなことをするこの若い刑事をおかしく思った。

更に、武上が深々とお辞儀をするので、笑いを噛み殺すのに苦労した。

本当にまだ刑事になりたてなのかもしれない。

それでも手帳を開くとキビキビと質問をしだした。

「お二人が門野プロダクションのマネージャーの八代景子さんとタレントの白木寿々菜さんですね？」

「はい」

「死んでいるのは水沼真紀子さん。同じく門野プロダクションのマネージャー」

「はい。間違いありません」

答えたのは景子だったが、寿々菜も心の中で同意した。変わり果てた姿ではあるが、間違いなく真紀子である。

「状況から見て、自殺と思われますが、何か心当たりはありますか？」

「心当たり？」

「最近様子がおかしい、とか、悩んでいたようだ、とか」
「さあ・・・」

景子が首をかしげた。

一方、寿々菜は不謹慎極まりないと自覚してはいるが、真紀子をかわいそうに思いつつも正直少しがっかりした。

なんだ、自殺かあ。

さすがにドラマみたいに「密室殺人事件です！」とはならないのね。

その時、部屋の入り口が俄かに騒がしくなった。
誰か来たらしい。

顔を上げた寿々菜の目に飛び込んできたのは・・・

え！？

KAZU！？

190センチ近くある長身と長い手足、

涼しげな目と高い鼻、二ヒルな口元、

そして何より、芸能人独特のあの雰囲気。

見間違ふことなく、KAZUその人である。

が、その表情は冴えない、というより、明らかに不機嫌だった。

「・・・なんだ、これ」

こんな状況ではあるが、突然のトップアイドル登場に誰もが口を開けなかった。

KAZUはお構いなしに、ズンズンと部屋の奥まで入り、辺りを見回した。

そして・・・ベッドの上に横たわる真紀子に目を止めた。

が、全く動じる様子もなく、KAZUは真紀子に歩み寄る。

「殺されてるじゃん」

いや自殺らしいんですよ、とはい出しにくい雰囲気だ。それでも、側の鑑識の人間が、かるうじて、

「まだ他殺とは断定できません」

と小さく言った。

KAZUはベッドの脇にしゃがみこむと、怖がることなくナイフが刺さった胸の辺りをじつと見つめた。

「真紀子は左利きだ。それにしてはナイフの角度が変だろ」

寿々菜の横で、武上が「えっ」と声を漏らすのが聞こえた。武上は急いでKAZUに近づき話しかける。

「それは確かですか？」

「何が？」

「この女性が左利きということですよ」

KAZUはしゃがみこんだまま、武上を睨み上げた。

「真紀子は俺のマナージャーだぜ？それくらい知ってるさ」

「は、はい」

「それとも、自殺だとも言いたいわけ？」

「遺書があるんです」

「遺書？」

武上は一通の紙を広げた。

もちろん手には手袋がされている。

「これが、リビングの机の上にありました。中には『さよなら』と書かれています。」

筆跡鑑定はこれからですが・・・」

KAZUは無言のままその手紙を取り上げた。
もちろん手には手袋などされていない。

武上は、一瞬青くなった。

「ふーん、確かに真紀子の字だな。でも、不自然だ」

「何がですか？」

「『さよなら』の一言しか書いてないし、最初から一言しか書くつもりがなかったら、

紙のこんな右端に書かないだろ？」

「・・・なるほど」

「名前もないし、『遺書』とも書いてないし。真紀子の性格からして、遺書を書くなら、

まず表にデカデカと筆で『遺書』って書いて、内容も遺産配分から仕事の引継ぎまで細々と書きそうだ」

寿々菜は思わず笑ってしまった。

真紀子のことをそんなによく知っている訳ではないが、確かに彼女ならそうしそうだ。

「・・・わかりました。慎重に調べを進めます」

すいー！ー！ー！

KAZUってすごい!!!

本当に探偵「御園英志」だ!!!

ドラマの中から出てきたみたい!!!

かっこいい!!!!!!

寿々菜はすぐそこに死体があることも忘れて、

目の中にハートを散りばめた。

そんなピンク光線に気づいたのか、KAZUが寿々菜と景子の方を
振り返り、

口を開いた。

「景子さん」

うわあ！

KAZUがこっち見てる！

正確には「こっち」ではなく、「景子」を見ているのだが、
寿々菜にとってはそんなことはどうでもいい。

「で、これ、なんのロケ？」

第3話 チャーハン&餃子半人前要員

ホテルのロビーでは、苦い顔をした面々が、
これまた苦いコーヒーを飲んでいた。

寿々菜と景子は、これからどうなるかしら、と不安で顔をしかめ、
KAZUは、純粹にコーヒーの苦さで顔をしかめ、
武上は、馬鹿そうな芸能人に事件のポイントとなるような点を指摘
されたことで、少々機嫌を損ね・・・

飄々としているのは、景子からの電話で駆けつけた社長の門野だけ
だ。

もつともこういう状況で飄々としているというのは、褒めるに値す
るかはわからないが。

武上が口を開いた。

「ええつと、要点を整理しますと・・・」

「するまでもないだろ」

口を挟んだのが誰かは言うまでもない。

この二人、どうも反りが合わないらしいわ

寿々菜は二人を見比べて思った。

だが、さすがに大人の武上はかろうじてKAZUを無視するに留ま
った。

「まず、八代さんが水沼真紀子さんに電話したのが1時半。これは間違いありませんね。」

八代さんの携帯には発信履歴がありましたし、部屋にあった水沼真紀子さんの携帯には受信履歴がありました」

「はい」

「そして、水沼真紀子さんに『2時に2303室に来てもらえば、2時半からのインタビューの前に少しKAZUと会える』と言われた」

景子が頷く。

「ところが、指定された時間に行っても部屋の中に人の気配がなく、もう一度水沼真紀子さんに電話をすると、中から着信音が聞こえたので不審に思い、

ホテルの従業員にマスターキーでドアを開けてもらった」

景子がいもう一度頷く。

「そして、白木さんが寝室で、死んでいる水沼真紀子さんを見つけた・・・で、よろしいですか？」

「はい」

今度は寿々菜が頷いた。

武上は、ハッとしたように手帳から顔を上げた。

「そういえば、インタビューする側の人間は・・・ええっと、雑誌Mでしたっけ」

「あ、それは私が帰しました」

景子が即座に答えた。

「インタビューは2時半からだったので、
2時15分くらいに雑誌Mの人たちが来たんですけど、警察の方は
まだ到着されてなかったですし、
部屋には入れない方がいいと思ひまして・・・」

申し訳なさそうにする景子を、武上が慰めるように言った。

「大丈夫です。雑誌Mの人間はおそらくこの事件とは関係ないでし
よう」

だが、やはりKAZUは手厳しい。

「そんなのわかんねーだろ」

武上はさすがにムツとした。

「もちろん！一応、確認は取ります。それよりも、君
「なんだよ」

「君はどうしてあの部屋に来たんだ？」

いつの間にか、KAZUに対する武上の言葉使いが変わっている。
が、まあ、無理もない。

「話、聞いてなかったのかよ？インタビュー受けに行ったんだよ」
「インタビューは2時半からなのに、君があの部屋に来たのは、も
う3時近くだったね」

「だから？」

「それまでどこで何をしてたんだ？」

KAZUが目を丸くした。

「おいおい。俺を疑ってんの？」

「殺されたのは君のマネージャーだ。確認しておきたい」

KAZUは肩をすくめた。

「家で寝てた。遅れてくるなんてのは、いつものことだよ。生放送ならともかく、

今日は仕事がこれ一本だったし」

「君は仕事がこれだけでも、先方はそうじゃないと思うけどね」

武上の非難もどこ吹く風。

KAZUはメニュー表を広げて、次は何飲もうかなー、とやりだした。

おもしろい人たちだな

寿々菜は下を向き、一人でクスクスと笑った。

だが・・・

寿々菜は、何か違和感を覚えた。

喉に魚の小骨がつつかえたような違和感を脳に感じた。

なんだろう・・・なんか、変な感じがする・・・

その正体をつきとめようと、寿々菜は努力したが、違和感という小石は脳の中で逃げ回り、結局寿々菜はそれを捕まえることができなかった。

その時、ホテルの入り口から、
まだそんなに年は取ってないであろうが、頭が少し寂しげな1人の
男が飛び込んできた。
相当に慌てている。

「社長！真紀子は・・・妻は！？」
「水沼君」

門野はようやく言葉を発すると、男の方へ近寄った。
武上と景子もそれに続く。

寿々菜はなんとなくタイミングを逃してしまい、KAZUと二人、
椅子に座ったままだ。
もともとKAZUは最初から立ち上がる気はなかったが。

「刑事さん。こちらは水沼俊夫君。真紀子君の夫で、うちの経理で
働いています」

「こんにちは」

「あ、あの、妻は・・・」

「お気の毒ですが亡くなりました」

武上は、直球で言った方が返ってショックが少ないだろうと思い、
敢えてサラリと告げた。

が、水沼はその場にヘナヘナと座り込み、泣き出してしまった。

「何食う?」

「わ、私はなんでも・・・」

KAZUの前で食べるなんて!!

「そ?じゃあ・・・おばちゃん!」
「はいよ」

いかにも「ラーメン屋のおばちゃんです」と言う感じの女性が、素早く、だけど、せかせかした感じを与えないスピードで、KAZUのところへやってきた。

「ラーメン二つと、チャーハンと餃子1人前ずつ」
「はいよ」
「杏仁豆腐、食う?」

あ、杏仁豆腐!

「食べます!」
「じゃ、それも二つ」

KAZUはご満悦、と言った感じである。

・・・信じられない。
KAZUと二人で食事だなんて。
ラーメンだけ。

いや、KAZUと食べるんだったらラーメンだってどんな高級料理

より素晴らしい！！

さて、どうしてこういう事になったかと言つと・・・

いくら殺人事件が起きたからと言って、社会的時間が止まる訳ではない。

門野と景子はすぐに仕事に戻り、

水沼は武上に連れられて、麻里子が搬送された病院へ行つた。

「俺を放置するなんて信じらんねー！ファンとかに見つかったらどうするんだよ、あのダルマ社長め！」

取り残されたKAZUが地団太を踏む。

ダルマ社長・・・

寿々菜は門野を思い浮かべて納得してしまった。

「たくつ」

「あ、あの！」

KAZUの横にいるファン1名が声をかけた。

「私、タクシー拾ってきましようか？」

うわ、KAZUに話しかけちゃった！

どうしよう！？

KAZUは、寿々菜を見下ろした。

「あんた、誰？」

「わ、私、同じ事務所の白木寿々菜と言います！芸名は『スウ』です！」

「スウ？」

KAZUは眉をひそめた。

「どうせ、またあのダルマが考えた名前だな？相変わらずセンスねーなあ。俺の名前にしたってさ」

「そ、そんなことないです！KAZUさんて名前、大好きです！」

「そおかあ？あんたもセンスないな」

「はい！」

「・・・。まあいいや。ところで、今から暇？」

「へ？は、はい！」

「じゃ、ちよつと付き合って」

と、いう訳で、寿々菜は「来来軒」というラーメン屋に連れてこられたのだった。

KAZUは水を一口飲んで言った。

「ここ、よくくるんだけどさ。いつも、ラーメンとチャーハンって組み合わせか、

ラーメンと餃子って組み合わせなんだよ」

「はあ」

KAZUは真剣そのものだ。
顔だけ見れば、仕事の話か、別れ話をしているかのよう。

「本当は、ラーメンとチャーハンと餃子の3つを食いたいんだけどさ。さすがに多いだろ？」

「はあ」

「だから、誰かが一緒に来てくれると全部食べられるから嬉しいんだよな」

たちまちKAZUは笑顔になった。

な、なるほど。

誰かと一緒にならラーメン1人前とチャーハンと餃子を半人前ずつ食べられる、という訳なのね。

さしあたり私は「チャーハン&餃子半人前要員」と言ったところかでも、どんな理由であれ！

「KAZUさんと食事できるなんて、光栄です！」

しかも、こんな笑顔付き！

だが、KAZUの顔は見る見る不機嫌になった。

「そのKAZUっての、やめてくれない？なんか疲れるから。名前がいいよ。本名は・・・」

「岩城和彦さん、ですよね」
いわきかずひこ

本名、岩城和彦。

3月31日生まれのB型。

15歳でデビューして、芸能暦7年目の21歳。

それに、身長、体重、靴のサイズ・・・

寿々菜の頭の中に、KAZUのプロフィールがパパッと出てくる。

KAZUのことなら、なんでも知ってるんだから！

一方KAZUは、おっ？と思い、寿々菜の顔を見た。
本名はほとんど出していないのに、よく知ってるな、と感心したのである。

「そう。和彦でいい」

「そんな・・・じゃあ、和彦さん、で」

言いながら、寿々菜は優越感を覚えた。

和彦さん！

他のファンの子達は（さっきまでは自分も）、KAZUのことはKAZUって当然呼んでるけど、

私は「和彦さん」！

なんかちよつと、一歩リードって感じ？

うわあああ！

寿々菜は、持ってこられたラーメンをすする和彦を愛おし気に見つめた。

ラーメンを食べるこんな姿、なかなか見れるもんじゃないわ。

これこそ「KAZU」じゃなくて「和彦さん」なんだ。

それに・・・なんかちょっとテレビとは雰囲気が違う。

テレビではもつと言葉使いもソフトで、いつもニコニコしてるのに、本当はこんな感じなんだ。

「自分しか知らない和彦さん」に、寿々菜はますます惚れこんでしまった。

「なあ、あんたのことはなんて呼べばいい？スウ？寿々菜？白木さん？」

「えっ、あ、あの、寿々菜、でいいです」

「わかった。寿々菜、な」

名前を和彦に呼ばれて寿々菜がどんな気持ちになったかは・・・書くだけ無駄なので割愛しておこう。

第4話 ファン

「そういえば、随分な落ち込みようだったな」

突然和彦が言った。

いくら恋する乙女と言えど、食べ盛りの16歳。

予想以上に美味しいラーメンを堪能していた寿々菜は不意をつかれて驚いた。

「え？」

「さっきの水沼」

ホテルのロビーで泣き崩れたことを言っているのだろう。

「そりゃ・・・奥さんが亡くなったんですから」

「そうだけどさ。水沼って真紀子と上手く行ってなかっただろ？それなのにあんな泣きじゃくるか？」

確かに、水沼と真紀子はあまり上手く行っている風ではなかった。

水沼は女にだらしないし、真紀子は仕事一筋だったためかもしれない。

でも、長年連れ添った夫婦なのだから、例え少々上手く行かなくなっても、

やはり死んだとなれば悲しいのではないだろうか？

寿々菜がそう言うと、和彦は「それもそうかもな」とポツリと呟き、そのまましばらく寿々菜を見つめた。

・・・え？何？

寿々菜はどぎまぎした。

もうラーメンどころではない。

「あ、あ、あ、あの！あの、武上さんって刑事さん、なんか面白い
ですよね！」

「はあ？」

和彦がとたんに不機嫌になる。

「俺、なんか、あいつ嫌い」

「みたいです」

お互い様だろう。

「でも、武上さん。和彦さんの推理に感心してたじゃないですか」

「あんなの警察が気づくべきだろ。それに推理じゃないし」

「え？」

和彦が声を低める。

「俺、本当にロケ、つつーか、真紀子の悪戯だと思ってたからさ。
ナイフの角度なんてでたらめだ」

「そうなんですか！？じゃあ、やっぱり自殺なんですか？」

「さあな。でも机に置いていあったって言う紙は遺書なんかじゃない
」

和彦は確信に満ちた声で言った。

「真紀子が遺書も書かずに自殺なんて考えられない。それに寿々菜に俺と会わせる約束してたんだろ？」

「はい」

「あいつが約束も果たさず自殺することなんてねーよ」

それだけ言うと、和彦は再び箸を動かした。

そういえば和彦さん、マネージャーが殺されたのに全然悲しそうじゃないな・・・

でも、今の言葉には真紀子さんへの信頼感が込められていた。和彦さんなりの悲しみ方なのかもしれない。

寿々菜は、テレビの中とは違い、ガツガツとラーメンを食べる和彦を見つめた。

「こんにちは」

「武上さん！どうしたんですか？」

事件の翌日。

学校帰り、事務所へ行く途中で寿々菜は武上と出くわした。

武上は昨日とは違うが、きちんとしたスーツを着ていて、どうやら非番の日の散歩、という訳ではないらしい。

実際、武上はフラフラ歩いていた訳ではなく、車の運転席から寿々

菜に声をかけたのだった。

「ちょうどよかった。会いに行こうと思っていたところです」

「私に？」

「はい。事務所に行くんですよね？送ります」

「ありがとうございます！」

まさか刑事が誘拐もないだろう。

寿々菜は無邪気に助手席に乗り込んだ。

「・・・って、あれ？刑事さんていつも二人で行動してるもんじゃないんですか？」

寿々菜は車の中に武上しかいないことに気づいて訊ねた。

「ははは、よく知ってますね」

「ドラマとかでよく・・・」

「そうです。でも今、聞き込みの最中で、相方の先輩は別のところにいます」

「聞き込み？じゃあ、私に用事って、それですか？」

「そうです」

武上は車を少し走らせると、事務所の近くのコンビニの駐車場に止まった。

「昨日は、八代さんからしかお話を伺ってないですからね。白木さんからも聞きたくって」

「でも、私は景子さん・・・八代さんとずっと一緒だったから、同じお話しができませんけど」

武上は頷きながら手帳を開いた。

「それでも結構です。一緒にいて、同じものを見ていても、八代さんが気づかず、

白木さんが気づいたこともあるかもしれませんので」

景子さんが気づかなくて、私が気づいたこと？

そんなのあるかな？

逆だったらいくらでもありそうだけど。

そうは思ったが、

寿々菜は仕方なく昨日見たことを話した・・・が、やはり景子と同じことしか言えなかった。

「あ！そういえば！」

「なんですか？」

「昨日、和彦さんが・・・」

「和彦さん？」

「KAZUのことです」

武上が顔をしかめた。

気持ちを抑せないのは和彦と同じだ。

「ふふふ、本当に和彦さんのことが嫌いなんですネ」

「嫌いと言っ訳じゃありませんが・・・元々、男性アイドルになんて興味ありませんしね」

まあ、そりゃそうだろう。

「確かに食えない奴だとは思いますが。でも、昨日のナイフの件は確かでした」

「え？じゃあ・・・」

武上が頷いた。

「はい。間違いなく他殺です」

すごい。

でたらめって和彦さんは言ってたけど、本当だったんだ！

寿々菜は何故か鼻が高くなる想いだった。

「あの、ところで、さっき白木さんが言われかけてたのは？」

「あ。和彦さんが言ってたんですけど、水沼さんと真紀子さんは上手く行っってなかったそうです。」

確かに、私の目にもそう映りました」

「・・・なるほど」

「あ、でも、だからって・・・」

武上は微笑んだ。

「わかっています。その話を聞いても水沼さんを犯人扱いすることはありませんよ。」

でも、参考になりました。ありがとうございます」

「いえ、そんな」

寿々菜は顔の前で手をブンブンと振った。

車は再び動き出し、事務所の前に着くと武上は寿々菜と一緒に車を降りた。

寿々菜は、事務所にも用があるのかな？と思ったが、そうではないらしい。

「あの・・・白木さん、お仕事頑張ってください。応援しています」

武上は照れくさそうに頭を掻きながら言った。
寿々菜は驚いた。

「え？私のこと、知ってるんですか？」

「はい。CMで見たことがあります。あと、たまにリポーターなんかもしてますよね？」

「は、はい！見てくれたんですね？ありがとうございます！」

胸が熱くなった。

あんな小さな仕事、誰も見てくれないと思っていたのに、こうして「応援しています」と言ってくれる人がいるなんて。

もちろん、社交辞令かもしれない。

でも、武上の言葉は本心のように思えた。

「えっと、じゃあ、失礼します、白木さん」

武上はそそくさと車に乗り込もうとした。

「武上さん。白木さん、じゃなくていいですよ？スウでも寿々菜でも・・・」

「では・・・寿々菜さん。失礼します」

「はい。お疲れ様です」

武上が「スウ」ではなく「寿々菜さん」と言う呼び方を選んだのは、
寿々菜がKAZUのことを「和彦さん」と呼ぶのと同じ種類の喜び
を感じるためだとは、
寿々菜にはわからなかった。

ただ・・・

よし！今日もがんばるぞ！！

と、自分に気合を入れると、事務所の中へと入って行った。

第5話 アイドル探偵誕生！？

悲しいかな、人一人死んでも世の中のほとんどの人間には変化なく毎日が過ぎる。

が、大きく変化した人間がここに3人。

「KAZU、よろしくね」

「よろしく、景子さん。あ、和彦でいいよ。真紀子もそう呼んでたし」

「じゃあ私も景子でいいわ」

二人はしっかりと握手した。

和彦は満足していた。

真紀子も優秀なマネージャーだったが、景子なら更に申し分なしだ。

そして、3人目がそれを未練タラタラという様子で眺めていた。

「景子さん・・・私、どうなるんですか？」

「大丈夫よ、スウ。しばらくは社長が直接スウの仕事の面倒を見してくれるから」

寿々菜は今度は門野に目を移した。

門野はいつも通り何食わぬ顔で机の上の資料に目を通している。

小さな事務所だ。

社長が直接タレントのスケジュールを管理する、ということもないではない。

「社長・・・現場に行く時とか、どうしたらいいんでしょう・・・」
「今までも自分の足で行ってただろ」

KAZUクラスになると、移動は当然マネージャーの運転する車だが、

スウクラスは、自分の足・・・もちろん、電車やバスという意味だ・・・で移動する。

ひどい時は、電車賃が自腹、なんてこともある。

「もちろん、自分で行きます。でも仕事場で誰もいなかったら、私、どうしたらいいかわかりません・・・」

寿々菜は情けない声で言った。

景子がいなければ撮影現場などでどこに行って誰に声をかけたらいいかわからない。

「それもそうだな」

門野が顔を上げた。

「がんばれ」

寿々菜は絶望的な気持ちになった。

「社長。警察の方がみえてます」

社長室の扉が開き、門野の秘書が顔をだした。

山崎という30歳の男で、なかなか見栄える顔をしている。

「ああ。通せ」

警察、と言つ言葉に全員が緊張した。

いや、門野は緊張したかもしれないがそれを顔には出さない。

和彦は・・・本当に緊張していなかった。

むしろ、警察と聞いて連想される人物に機嫌が悪くなった。

つまり明らかに緊張したのは、寿々菜と景子だけだ。

「失礼します」

入ってきたのはもちろん武上と、その上司らしき年配の男。

武上の「相方」らしい。

そしてその後ろから、二人に連れられるようにして真っ青な水沼が続く。

寿々菜は武上を盗み見た。

昨日、「応援しています」と言われたのを思い出したのだ。

武上も寿々菜をチラッと見て、少し赤くなる。

が、表情を引き締めて門野の方を向いた。

年配の刑事が口を開く。

「こんにちは。私、W署の三山と申します。

こちらの水沼さんに、任意で同行頂きたいのですが、よろしいで

すか？」

「構わん。勝手に連れて行け」

「しゃ、しゃちょー・・・」

水沼が情けない声を出す。

「なんだ？ただの任意同行だろ。逮捕される訳じゃあるまい。それともお前が真紀子を殺したのか？」

「ま、まさか！」

水沼はますます青くなった。

気絶しちゃうんじゃないかしら？と寿々菜が心配になったくらいだ。

「おい、武上」

「・・・なんだよ」

和彦と武上がバチバチと火花を散らす。

別に何かを取り合ってる訳ではないのだが、こうせずにはいられないようだ。

「任意だろうとなんだろうと連れてくってことは、なんか理由があるんだろ」

武上は咳払いをし、

「岩城さんにお話する必要はありません」

と、わざと丁寧に言った。

だが相手が悪い。

なんせ「皮肉」という文字のない辞書を持つ男だ。

「吐け」

「うるさい」

「景子。今日、生放送でトークだったよな？日本警察の傲慢さについて語ってやる」

武上はため息をついた。

「・・・2ヶ月前、水沼さんは奥さんの真紀子さんの保険金を増額している」

「ふーん」

「そ、それは！それは、妻ともしもの時のことを相談して・・・私の保険金も増やしてます！」

「その辺のお話は署で伺います」

二人の刑事は、今度こそ水沼を引っ張って連れて行ってしまった。

「はあ・・・」

緊張の糸が切れたかのように、寿々菜と景子は同時に息を吐いた。

まさか自分が武上にあんなこと言ったから、武上は水沼を調べたのだろうか？

寿々菜は何故か水沼に対して申し訳ない気持ちになった。

もし水沼が犯人ならともかく、そうでないなら人権侵害とかで訴えられるんじゃないかしら？

「おい、和彦。お前、ナイフの向きがおかしいと、警察に言ったらしいな」

門野がまた資料に目を戻して言った。

「まーな」

和彦は寿々菜に「余計なこと言っなよ」とでも言っように目配せする。

寿々菜は、といえば、和彦の意図は全くわからず、ただ和彦が自分に意味ありげな視線をよこしたことに舞い上がっていた。

「遺書が不自然だ、と指摘もした」

「したけど？」

「お前、御園探偵シリーズやってるうちに、本当に推理力がついたんじゃないか？」

「さあな」

和彦は嫌な予感がして、のらりくらりと門野を交わした。だが門野も和彦のことは知り尽くしている。ここで直球勝負に出た。

「和彦。犯人を捜してみないか？」

「イヤだ」

門野と和彦の言葉の間、僅か0・1秒。しかし門野はめげない。

「うちの事務所の名誉がかかってる。犯人を見つければ、給料を」

Pするぞ？」

「もうじゅうぶん貰ってる」

「社長命令だ」

「イヤだ。どうしてもっつーなら、事務所やめるぞ」

「・・・」

今度は和彦と門野の睨み合いだ。

門野にこんな態度を取れるのは和彦くらいだ。

寿々菜は和彦が本当に事務所をやめるのでは、と冷や冷やした。

が、和彦がニヤリと笑った。

「おい、正直に言え。俺が事件を解決したら、『御園英志、現実世界でもお手柄！』みたいな触れ込みで、

どっかの局に特番やらせて一儲けするつもりなんだろ」

「わかってるなら、素直に従え」

「めんどくせー。てゆーか、できる訳、ないし」

「そうか。お前が活躍すれば、『彼女』もお前を見直してくれるかもしれないと思ったのだが・・・」

門野の言葉は効果絶大だった。

和彦の表情が見る見るうちに穏やかになる。

どうしたんだろう？

「彼女」って誰？

・・・まさか・・・

寿々菜は、和彦のブログを思い出した。

そう、忘れられない初恋の人がいる、というアレだ。

恐らく、何らかの理由で和彦は振られてしまったのだ。
だから、「見直してくれるかもしれない」という門野の言葉に、
和彦はこれほど反応している。

実際、和彦は今でもじゆうぶんに活躍している。

それでも「見直して」もらえてない、ということは、
今度の事件を解決したって、意味ないんじゃない・・・

とは、寿々菜は言わなかった。
その代わりに、

「私！和彦さんの助手をします！」

と叫んだ。

「じよしゆう???」

和彦の顔が今度は歪む。

「なんだ、その助手って」

「探偵には助手がつきものです！今度、御園探偵シリーズに私も出
させてもらいますし！」

「ふふん、面白いな」

和彦を無視して、門野がニヤツと笑った。

「これで本当に事件が解決したら・・・そうだな、
『御園探偵、美人助手と共に殺人事件解決！その実録！』ってなタ
イトルでどうだ？」

「なげえ・・・てゆーか、助手の形容詞が間違ってる」

「なんでも大袈裟に言つたもん勝ちだ」

どういう意味だろう。

寿々菜は本気で首を傾げた。

けいようし、ってなんだっけ？

「スウ。どうせお前は暇だろ」

「はい！仕事、ありません！」

勢いよく答えるべきことなのか。

「よし、じゃあお前も和彦と一緒にやってみろ」

「はい！」

「いーやーだー」

和彦の声はまたまた無視され、

こうして和彦と寿々菜二人の素人探偵始動とあいなった。

第6話 推理

「探偵！私は何をしたらいいでしょうか！」

「・・・」

事務所のレストスペースでコーヒーを飲む和彦の横で寿々菜は叫んだ。

ちなみにレストスペースと言っても、自動販売機とテーブルがあるくらいだ。

喫煙ルームなどという洒落たものもない。

「たく、寿々菜が余計なこと言うから・・・」

「面白そうじゃないですか！」

「じゃあ、何にもするな。警察に任せとけ。これが指令だ」
「・・・」

寿々菜はむうっと膨れたが、珍しく名案を思いついた。

「はい！じゃあ、武上さんに任せます」

和彦の眉がピクツと動く。

「警察」に任せるとは言ったが、「武上」にさせるなんてとんでもない！

寿々菜は和彦にクルツと背を向け、更に続ける。

「もし、和彦さんが本当に解決したらバライティーとかだけじゃなくって、

普通のニュースとかでも取り上げられますよね、きっと。

サスペンスも、御園探偵シリーズ以外にもどんどん依頼が来るようになりますよね。

そしたら、和彦さんがテレビに映る機会がますます増えますよね。そしたらそしたら、もっとたくさんの方が和彦さんの顔を見ますよね。

そしたらそしたらそしたら、和彦さんが見てもらいたい人も見てくれるかも……」

背を向けていても、和彦がドギマギしているのがわかる。

寿々菜は複雑な気持ちだった。

好きな人が、初恋の女性のことを思い出し、戸惑っている。

でも、その「彼女」のお陰で、自分はこうして和彦と共に探偵まがいのことができる訳で……

「わかったよ」

和彦は諦めたようにため息をついた。

「やってみよう。でも、俺だって、いくらドラマで探偵役やってるって言っても、素人だぞ？」

何から始めていいものやら」

和彦は頭の後ろで手を組んだ。

「うーん。やっぱり水沼さんから話を聞く、が、最初ですかね？」

「そうだな。他に、真紀子を恨んでそうな奴とかがいればいいんだけどな。そんな都合いい奴いいねーし」

都合がいいのか悪いのか。

「実は真紀子さんに愛人がいた、とかないですか？」

「ないない。あいつ、仕事の鬼だったから。旦那のことすら愛していたかどうか。」

むしろ逆に旦那の方には愛人がいてもおかしくないな」

「水沼さんに？」

「共働きだし、金は持ってたからな」

なるほど。

水沼の愛人が、嫉妬で妻の真紀子を殺す・・・

ありそうな話だ。

「なんか単純すぎて面白くありません」

「・・・なんだ、面白くありません、って。殺人事件だぞ、面白くするな」

「だってー。なんか、こう・・・複雑な密室トリックとか」

「ドラマじゃあるまいし。現実ってのはもっと単純だ。」

愛人どころか、やっぱり水沼が犯人でした、ってのが普通だろ・・・ん？ちよつと待て」

「え？」

「さっき密室って言ったか？」

「はい」

「・・・」

和彦は考え込んだ。

「犯人は1時半から2時の間に真紀子を殺したんだよね？」

「って武上さんが言っていました」

「武上はどうでもいい。」

とにかく、犯人はその時間帯に真紀子がTホテルの2303室にいると知っていた訳だ」

「はい」

「部屋はオートロックだから、真紀子が部屋に入れない限り犯人は中に入れない」

「でも、無理矢理押し入ったのかも」

「それなら多少なりとも部屋が荒らされてるだろ」

部屋は全く荒らされていなかった。

それは寿々菜自身が一番最初に見たのだから間違いない。

「真紀子があの時あそこにいると知っていて、なおかつ、真紀子がすんなり部屋に入れる奴・・・
誰がいる？」

寿々菜は頭の中に何人かの顔を思い描いてみた。

「えーっと。社長は知っていたかも知れませんがね。あと、水沼さんも。」

他には・・・あ！雑誌Mの人も知ってますね！」

「そうだな。まだいるぞ」

「え？えー・・・わかりません」

「寿々菜、景子、そして俺」

「ええ！？」

寿々菜は目を丸くした。

「和彦さんが殺すわけじゃないじゃないですか！」

「わかんねーぞ。殺してから一度ホテルを出て、後から『今、到着しました』って顔して

現れただけかも知れない」

まるで他人事である。

「ま、俺は犯人じゃないけどな。それは俺が保証する」

・・・それは保証になるのだろうか。
だが、寿々菜は納得した。

「そうですよ。和彦さんはそんな人じゃありません！それに、私も殺してません」

「証拠は？」

「景子さんと一緒にいました」

「景子と寿々菜が共犯だったら？」

「うっ」

寿々菜はつまつた。

確かに二人が共犯の場合、「景子さんと一緒にいました」は証拠にならない。

「はは、わかってるって。寿々菜は犯人じゃない」

「和彦さん・・・信じてくれるんですね？」

「いや、寿々菜には真紀子を殺す理由がない。寿々菜が水沼の愛人ってゆーなら話は別だけどな」

「違います！」

「もしくは、真紀子に弱味を握られていたとか」
「握られてません！」

てゆーか、弱味がありすぎじゃねーの？
と、言いかけて和彦はなんとか思いとどまった。

「とにかく、寿々菜は犯人じゃない。ってことは一緒にいた景子も犯人じゃない」

「はい」

「ということは犯人は、社長か水沼か雑誌Mの人間か。で、いいのか？誰か抜けてないか？」

なんだか一気に絞り込まれた感じである。

こうなると、返って不安だ。

「いや、待て待て。真紀子自身が、自分の居場所を友達とかに話してる可能性もある。

それに雑誌Mの人間ってってたって、俺に直接インタビューする奴ら以外も、

俺のスケジュールを聞いてるかもしれないし・・・だめだ、全然絞れてない」

和彦はため息をついた。

なかなかドラマのようにはいかない。

「あの日は俺の仕事がたまたまあれだけだったからよかったようなものの・・・

詰まったら、雑誌M以外の奴らもあの時間に俺と真紀子がTホテルにいてること知っててもおかしくないもんな。そしたらもう収集がつかない」

「そうですね。その前後の仕事の関係者は知ってるでしょうね」

その時、寿々菜は閃いた。

あの事件の日に感じた違和感の正体である。

「そつか！なんか変だと思ったら！」

寿々菜の突然の大声に、和彦は驚いた。

「何が？」

「事件の日、ホテルでみんなが話すのを聞いて変な違和感を感じたんです。そつかー。これだったのかー！」

「は？」

「いえ、事件とは関係ないんですけど。和彦さん、あの時『今日は仕事がこれ一本だったし』って

言いましたよね？和彦さんみたいな忙しい人が、一日に仕事が一つだけだなんて変だなって思っただんです！」

和彦はガクツと来た。

事件の手がかりでもあったかと期待したが、全くの期待はずれだった。

「あの日は本当は1日オフのはずだったんだよ。急にあの仕事だけ入ったんだ」

「1日オフ？珍しいですね」

「3ヶ月ぶり」

「うわ・・・それなのに昼に仕事って・・・迷惑ですね」

「だろ？まあ、真紀子もそう思ってくれてたはずだけど、それでも入れたってのは、

よっぽど断れなかったんだろ」

「そうですね。雑誌Mなんて、和彦さん初めてですもんね。

真紀子さん、どうしても受けときたかったんだろうなあ」

え？

和彦は顔を上げた。

寿々菜は何食わぬ顔をして、ジュースを飲んでいる。

初めて？

そう、雑誌Mなんて初めてだ。

確かにこれからお世話になりたい雑誌なら、オフを返上してでも取材を受けるべきだが、

雑誌Mは芸能方面に強い雑誌ではない。

和彦サイドとしても興味ない雑誌だし、雑誌Mからしても何が何でも和彦にインタビューを取りたい！
という訳じゃないだろう。

実際、あの事件で取材はお流れとなった。

延期ではない。中止だ。

その程度の取材を、真紀子がわざわざオフの日に入れるなんて・・・
よほど誰かに頼まれたのか？

和彦はぬるくなったコーヒーを見つめた。

第7話 初恋の人

事務所を出た寿々菜の足取りは軽かった。

和彦さんとあんなに話ができるなんて！

しかも、ずっと引っ掛かってた違和感もなくなって、すっきりした。そう、すっきり・・・

寿々菜は歩調を弱めた。

そうだろうか？

確かに、和彦の仕事に関する疑問はなくなった。

でも、まだ何か引っ掛かってる。

なんだろう？

寿々菜はしばらく考えてみたが・・・

ま、いいか。

元々熟考向きの頭ではない。

そのうちすっきりするさ、と再びスキップでもしだしかねない勢いで、家路についた。

「だから！保険金の件はさっきから言ってるでしょー！？」

水沼はイライラした様子で取調室の机を叩いた。
もう何回も保険金の増額理由を聞かれ、うんざりしているようだ。

「わかりました。では、事件の日の・・・死亡推定時刻である午後1時から2時までの間、どこにいましたか？」

武上は質問を変えた。

景子の話を考慮すると、1時半にはまだ水沼真紀子は生きていたことになるが、それは敢えて伏せておいた。

「八代さんがあなたと門野社長それぞれに連絡したのが2時5分頃。そしてあなたがTホテルに到着したのが3時過ぎ。随分時間がかかっていますか」

水沼は待つてましたとばかりに勢いよく答える。

「事件の日、私は休みでした。だから昼頃まで寝てて、起きてから行きつけの漫喫に行っていました」

「漫喫？」

「はい。S駅から歩いて10分くらいの『プラム』という漫喫です」

武上は手帳に「S駅」と「プラム」の文字を書き込んだ。

S駅は、水沼の自宅の最寄り駅である。

そして、事件現場のTホテルの最寄り駅であるT駅からは、1時間にかかる。

つじつまは合う。

「そのプラムには何時から何時までいましたか？」

水沼は首を振った。

「家からプラムに向かう途中に、八代さんから連絡をもらって急いでS駅に向かいました」

「では、それを証明する人はいないわけですね」

「そ、それは・・・そうだ！S駅の駅員に聞いてみてください！」「駅員？」

「S駅からTホテルまでの行き方がわからなかったので、駅員に大急ぎで調べてもらったんです！」

「本当です、駅員に聞いてください！」

水沼の物凄い勢いに武上は若干引き気味になりながらも、手帳に「S駅の駅員に聞き込み」と付け加えた。

武上はまだ24歳で、刑事になって2年目だ。

取り扱った事件の数はそう多くない。

それでも、刑事の直感とでも言うべきか、

恐らく水沼の言う通り、水沼のアリバイを証言する駅員が現れるだろう、と感じた。

そして休日だから家の近くのS駅付近にいた、という点、

S駅からT駅は電車で1時間かかり、水沼も電話からきっちり1時間で現場に駆けつけた点。

完璧なアリバイだ。

まるで計算されたかのように。

一方、和彦は新たに専属マネージャーとなった景子と生放送のスタジオにいた。

すっかりカメラ向けの笑顔になり、司会者とやりとりしている。

「じゃあ、KAZUさんの噂の初恋の女性はもうお子さんがいらっしやるんですね？」

「そうですねー。囚われの身になって、無理矢理妊娠させられた拳句、島流しにされちゃったってゆー悲劇のヒロインです。僕のところに来てくれれば、いつでも面倒見てあげるのに」

「あはは、KAZUさん、面白いお話ですね」
「でしょー？」

言葉遣いまでかわり、もはや別人である。

景子は素直に関心した。

そう言えばあの時も・・・

景子は6年前のことを思い出した。

和彦がデビューする直前のこと。

景子は社長と真紀子と一緒に、地方にある和彦の家へ挨拶に行った。その時、例の「初恋の女性」にも会ったのだ。

あの時も和彦は今のようなテレビ向けの笑顔と言葉遣いだった。

和彦はずっと、彼女の前では「良い自分」を演じていた。

それが今の和彦の演技力の土台となっているのかもしれない。

もっとも、彼女はそんな和彦の二面性を見抜いていた。

だから和彦から離れていったのかもしれない。
いや、それ以前に・・・

景子はふと、思った。

そう言えば、彼女。

誰かに似ている。

誰だろう・・・

「はー。よくしゃべった。景子、なんか飲み物ある？」

「はいはい。お茶かアクエリアス、どっちがいい？」

「アクエリ」

和彦はアクエリアスを景子から受け取ると、一気に半分まで飲み干した。

「今日はまた一段と、『彼女』について突っ込まれたわね」

「何がそんな面白いんだろーな」

「そりゃ面白いでしょ。トップアイドルが未だに初恋の女の子を想ってるなんて、

かつこのワイドショーネタよ」

「ブログになんて、書かなきゃよかった・・・」

和彦は再びペットボトルに口をつけたが、

「彼女。見てくれてるといいわね」

という景子の言葉に口に持っていきかけた手を戻した。

「見ても会ってはくれねーよ」
「・・・そうかもね」

和彦の2面性を嫌い、和彦から離れた彼女。
でも、そんな和彦を丸々好きでいてくれる女の子とだってきつ
るはず。

そう、スウみたいに・・・

「あ！スウ！」

景子は思わず声に出した。

「スウ？ああ、寿々菜か。寿々菜がどうかしたのか？」
「誰かに似てると思ったら、スウだわ！スウと彼女って凄く似てる
！」

和彦の目の色が変わった。

「・・・やっぱりそう思うか？」
「なんだ、和彦のそう思ってたの？」
「ああ」
「そう・・・でも」
「でも？」

景子はニヤツと笑った。
こっという表情もまた美しい。

「スウにはお姉さんがいるんだけど、お姉さんの方が彼女と似てる
わ」
「そうなのか？」

「ええ。スウより地味なところが」

和彦は目を見開いて笑った。

「はは、正直だな、景子。確かにあいつ、顔は地味だなー」

そして、視線を照明で眩しい天井に向け、
懐かしむような表情で呟いた。

「ほんと、地味な顔だよ。俺の双子の妹だつてのに」

第8話 違和感再び

数日後。

寿々菜は再び景子とCMの撮影現場にいた。

先日の田舎とはうって変わって、東京のど真ん中。

ちなみにCMと言っても寿々菜がメインではない。

「横断歩道を渡る通行人」というただのエキストラだ。

でも、武上のように見てくれている人がいる。

そう思うと寿々菜は俄然やる気が出てきた。

「頑張るぞ！」

1人でファイティングポーズを取ってみる。

「ふふ、えらく気合が入ってるわね」

「はい！あ、すみません、景子さん。忙しいのに来ていただいて」

「さすがに社長を現場に付き合わせる訳にいかないしね」

景子が以前担当していた数人のタレントを見るマネージャーがまだ決まっていない。

スケジュール管理は社長である門野が自ら行っているが、現場に同行、というのは無理がある。

そこでしばらくは、景子が和彦専属でありながら、こうやって寿々菜などの面倒も見ることになった。

そんじょそこらのタレントより遥かに多忙だ。

「そういえば！この前の和彦さんの生トーク、泣けました・・・」

「泣けた？」

生トークとえば、先日和彦が散々「初恋の女性」について訊ねられ辟易していたあのトークのことだろう。

泣けるようなこと言ってたかしら？

景子は首を傾げた。

寿々菜はそんな景子にお構いなしに鼻をすする。

「囚われの身になって、無理矢理妊娠させられた上に島流しにされちゃうなんて・・・

和彦さんの初恋の人、かわいそうです・・・」

「ちょ、ちよつと、スウ」

どうみても本気で涙ぐんでいる寿々菜に、さすがの景子も慌てた。

「あれは和彦の作り話よ！信じちゃダメよ！」

「そうなんですか？」

「当たり前でしょ。何時代の話よ、全く」

あんな稚拙な作り話さえ信じてしまえる無邪気さは、いつそ寿々菜の特技である。

変に芸能界に染まらないで欲しいという景子の気持ちも頷ける。

「じゃあ、和彦さんの初恋の人は、今どこで何してるんだろ・・・」

「さあ。それはわからないけど」

「和彦さん、探し出して結婚するつもりなんでしょうか？」

「・・・」

さて、噂の「初恋の女性」が実は和彦の双子の妹だと寿々菜に教えていいものか。

景子は1秒悩んだが、それは言わないことにした。

寿々菜が和彦に幻滅することを心配したからではない。

例えば事実を知ったとしても、寿々菜の和彦に対する憧れは変わらないだろう。

景子が言わなかったのは、和彦の恋はあくまで一方的なもので、いわゆる近親相姦のようなことはなく、単純な片思いだったからだ。それならば相手が誰でも関係ない。

敢えて寿々菜に言う必要もない。

和彦の妹は、自分に極端な愛情を抱く兄の和彦を毛嫌いし、物心ついた頃から和彦を避けてきた。

でもそれも「シスコンのお兄ちゃんがうっとうしい」という普通の兄妹レベルの「嫌い」だった。

ただ、早く兄から独立したいという想いが強かったのか、

和彦の妹は高校生になった頃からしょっちゅう家出を繰り返し、結局高校卒業後、家にまったく戻らなくなった。

和彦が言っていた「囚われの身になって云々」という話も、全くのでたらめではないのかもしれない。

「和彦さんが結婚しちゃったら・・・やっぱりちょっと寂しいです」

しゅんとする寿々菜を見ると、景子も慰めずにはいられない。

「大丈夫よ、スウ。和彦は初恋の人と結婚する気はないわ」

とゆうか、できないのよね。

と、心の中で付け足す。

「誰ともまだ結婚なんてしない。そうだ。そう言えば、和彦が『初恋の人と寿々菜が似てる』って
言ってたわよ？」

「・・・え？」

寿々菜の顔が一瞬にして真っ赤になる。

和彦さんの初恋の人と私が似てる？
本当に？

じゃあ、少なくとも私の顔は和彦さん好みってこと！？

さっきまでの沈んだ気持ちが一気に跳ね上がった。
ついでに身体も本当にピョンと跳ね上がった。

じゃあ、じゃあ、頑張れば、私のことも好きになってくれるかもしれない！

単純にそうとは言えないが、短絡的にそういう考えに行き着けるのも、寿々菜の特技だ。

「ま、とにかく、和彦のことは心配しなくても大丈夫・・・あら？」

景子の目がある一点で止まった。

「景子さん？」

寿々菜も景子の視線を追いかける。

それはかなり遠くを見ているようだ。

ビル街の合間に取り残されたような、いかがわしい界限・・・
ラブホテル街だ。

昼間だと言うのに、チカチカしたネオンが目を引き。

そこから1組のカップルが腕を組んで出てきた。

景子の目はその二人を追っている。

その理由は寿々菜にもすぐわかった。

「あの男の人・・・水沼さん？」

「・・・みたいね」

寂しげな頭に、少し腹の出た体格。

間違いなく、水沼だ。

横にいるのは水沼にはもったないくらいの若くて美人な女子大生風の女。

出てきた場所が場所だが、そうでなくても不釣り合いな組み合わせである。

「真紀子さんが・・・奥さんが殺されたばかりだって言うのに」

景子がため息をついた。

「本当ですね。疑ってくれて言ってるようなもんですよね」
「ほんとね」

寿々菜と景子は遠ざかっていく二人の後姿をいつまでも見ていた。

・・・あれ？まただ。

寿々菜は頭の中に石ころを見つけた。

それは存在を主張するようにコロコロと転げまわる。

なんだろう、この違和感。

前に、Tホテルで感じたような違和感。

あの違和感の一部は解決したけどまだ半分残っているというのに、
また新たな違和感を見つけてしまった。

やだなあ・・・すつきりしない。

寿々菜はまたそれを解決できないまま、撮影現場へと戻った。

第9話 共演実現！

昼間の「すつきりしない感」はどこへやら。

寿々菜は夜の街をスキップをしながら、あるところへ向かっていた。

来來軒だ。

夕方に和彦から携帯がかかってきて、夕食に誘われたのだ。
用件は分かっている。

水沼真紀子の事件についてだろう。

それでも寿々菜の心は躍った。

とにかく和彦に会えるだけで嬉しいのだ。

理由なんてどうでもいい。

が。

さすがに少し凹んだ。

「ラーメン二つにチャーハンとギョーザを1人前」

「はいよ」

「・・・」

「どうした？」

「いえ・・・」

なんてことはない。また「チャーハン&餃子半人前要員」に呼び出しがかかっただけだ。

事件解決についての話し合いですらない。

だが、二人に共通の話題と言えばそれしかないのも事実。

自然、話はそちらへ流れた。

「なんかわかったこととかあるか？」

「いえ、何も」

「だよな。俺も」

「武上さんに聞いてみましょうか？」

「ダメ」

ちょうどラーメンが来たので、二人はお箸を取った。

汁に油が程よく浮かんでいて、見ていだけで食欲をそそられる。

「あれ？」

「どうした？」

「なんか、違和感が・・・」

「違和感？」

寿々菜は自分と和彦の前に置かれたラーメンを見比べた。

一見同じに見える。

が・・・何か違う、気がする。

「ああ。コレだろ？」

和彦が自分のラーメンの麺をすくい上げた。

細めの縮れ麺だ。

一方、寿々菜の方は、中太のストレート。

「あ！麺の種類が違う！」

「ここのラーメンは基本、中太のストレートなんだけど、俺は縮れ麺が好きだから、

何も言わなくても、いつもこうしてくれるんだ」

「へー。お得意さん、って奴ですね」

「だな。しかし、よく気づいたな」

「いえ、なんとなく」

寿々菜は「いただきます」と言っテラーメンを口に運んだ。

相変わらず美味しい。

和彦が常連になるのもわかる。

「私、昔からちよつとでも変なことがあると、すぐに違和感を感じるんです。

でも、いつもその正体は分からずじまいで、すつきりしないんですよねー・・・」

「そういえば、前も俺の仕事が少ないことに違和感を感じてたな」

「はい。今日も、水沼さんがホテルから出てくるの見て、違和感を・

・・・」

「おい。なんだ、それ？聞いてねーぞ」

あれ？言っテなかったっけ。

寿々菜は景子と一緒に昼間見たことを、和彦に教えた。
すると和彦は腕を組み、唸った。

「ふーん・・・てゆーか、そーゆー大事なことは言えよな」

「ご、ごめんなさい」

「でも、なんだろうな、その違和感の正体」

「そうなんですよね。わからないんです」

「女に見覚えがある、とか？」

「いえ。全く知らない人でした」

「そっか・・・」

さすがに和彦も自分で見たわけではないので、寿々菜の違和感の正体は皆目見当もつかない。
しかし。

「寿々菜。お前、いい勘してるよな。これからもなんか違和感感じたらその場ですぐに教えるよ?」

「はい!でも、前みたいにな、事件と全然関係ないかも」

「いや・・・関係ないかも」

「え?」

「実はさ」

和彦は、あの雑誌Mについて調べていたのだ。
どうしてオフを返上してまでインタビューすることになったのか。

「雑誌Mの担当者の話だと、そもそもインタビューの話はこっちからあったらしいんだ」

「こつち、って門野プロダクションからってことですか?」

「ああ」

これがそもそもおかしい。

雑誌Mにインタビューされても、和彦にも事務所にも得はない。

門野社長も、雑誌Mのインタビューについては真紀子が独断で進めていたようで、

全く何も知らないようだった。

「しかもあんな田舎のホテルでインタビューなんて・・・おかしいよな」

「そうですね」

タレントはマネージャーに「こつ」と言われたら「そういうもんだ」

と思い、

何も考えずに従ってしまいやすい。

それはマネージャーに全幅の信頼を置いているからでもあるが、同時にマネージャーに好きに操られてしまう可能性もある。

真紀子がそうだと思いたくないが・・・

さて。

ここまででは来たが、素人二人にはここから何をどう調べていいかわからない。

いつそ死んだ水沼真紀子に話を聞けないものか、なんてことまで頭をよぎる。

ルルルルル

「あ！すみません」

寿々菜が携帯片手に立ち上がろうとしたが、和彦は「座ったままここでしゃべっていい」とでも言うように手を上下にパタパタとさせた。

寿々菜は回りに声が漏れないように、手をあてがいながら電話に出る。

「はい」

「寿々菜さん？武上です。すみません、突然」

「え？武上さん！？」

向かいの和彦の顔が一瞬で曇る。

「はい。伺いたいお話がありまして・・・門野社長に寿々菜さんの携帯番号を聞きました。すみません」

「いえ。全然構いませんけど。なんでしょうか？」

「あの、よろしければお会いできませんか？・・・食事もついでに」

モゴモゴと付け足すところが、なんだかかわいらしい。
照れ屋さんなんだなあ。

と、相変わらずピントのずれたことを考えながら、
寿々菜は目の前のラーメンと和彦を見た。

すると和彦が無言で寿々菜の携帯を取り上げた。

「おい。なんか新しい情報でも出たのか？」

「・・・どうしてお前が寿々菜さんと一緒にいるんだ」

「どうしてでもいいだろ。寿々菜を誘うならいいところ連れて行けよ」

「・・・わかってる」

「少なくともホテルのレストランだ」

「ホテル？」

「Ｔホテルなんてどうだ？」

警察手帳の効果は絶大である。

フロントで武上がチラッとそれを見せるだけで、
ほとんど会話の必要なく2303室へ案内された。

事件以来2303室は使用されておらず、ホテルとしても困っているようだ。なんと言っても稼ぎ頭のスイートルームなのだから。

部屋で3人になると、武上が口を開いた。

「どうしてお前も一緒なんだ」

「お前、じゃない。和彦だ」

武上がため息をつく。

「じゃあ、和彦。ここに何の用だ？」

「ちよつと行き詰ってな」

「行き詰まり？」

「寿々菜と探偵業を始めたんだけど、思うように進まなくてさ」

「・・・なんだと？」

武上としては「探偵業」より「寿々菜と」の方に引つ掛かりを感じる。

もちろん和彦もそれを承知で「寿々菜と」を強調した。

和彦が寿々菜に目配せする。

「あ。えつと、武上さん。この部屋見て回っていいですか？」

「は、はい」

寿々菜に頼まれると武上も弱い。

「ちょっと待て、寿々菜。役者が二人もいるんだ。再現してみようぜ」

「再現、ですか？」

「そうだ。寿々菜が真紀子役、俺が犯人だ」

「はい！」

寿々菜は目を輝かせた。

なんだか本当に「御園探偵」みたいだ！

武上はおもしろくない、という感じで、

しかし邪魔にならないように奥の壁にもたれた。

第10話 疑い

和彦が一度部屋の外に出て、ノックする。

「は、は、はい！」

かなり挙動不審になりながら、寿々菜・真紀子がドアを開ける。

「おい、寿々菜。お前一応役者だろ。もうちょっとマシな演技できないのかよ？」

ドアの向こうで和彦・犯人が呆れ顔を見せる。

「す、すみません・・・」

「まあ、いい。続き」

「は、はい！えっと・・・」

あの日、部屋は荒らされてなかった。

だから犯人は恐らく真紀子の顔見知りなのだろう。
と、言うことは・・・

「じゃあ・・・お茶でもいかがですか？」

「ああ。もらおうかな」

二人でリビングのソファーへ向かう。
その時。

「ちょっと待った」

武上が声をかけた。

和彦が、ニヤツとする。

「武上も気づいたか？」

「ああ・・・おかしいな」

「へ？何がですか？」

得たり、と言う顔の和彦と武上とは対象的に、
寿々菜はポカンとするばかり。

「寿々菜。真紀子はどこで殺されていた？」

「えっと。ベッドの上？」

「そうだ」

「あ！そうか！」

ただの客なら、寝室に一緒に行くはずがない。
それでいてベッドの上で死んでいたと言うことは・・・

「そういう相手だった、ってことだ」

和彦が頷きながら言う。

しかし、武上はまだそれだけでは納得しない。

「だが、最初はリビングに一緒にいて、途中で犯人がナイフを取り出し、

水沼真紀子が寝室に逃げ込んだところで刺した、って可能性もあるぞ」

「そうだな。じゃあそういう設定で続けてみよう」

和彦は自分の携帯をナイフに見立てて、寿々菜へ向けた。

寿々菜は多少青くなりながら、寝室に逃げ込む。

そして・・・

ドン！！

和彦が寿々菜を携帯で押し、ベッドへ倒れこませる。

「いた！」

「あ、悪い」

「おい！和彦！優しくやれ！！」

「あー・・・思わず」

寿々菜は刺された左胸を抑えながらベッドから立ち上がった。

「・・・あれ？和彦さん。また違和感です」

「お。来たか」

武上は会話の意味がわからず、二人の顔を見比べた。

「なんだろう。あの日とは何か違う感じがする」

寿々菜がそう言うと、武上がスーツの内ポケットから何を取り出した。

「事件の日の写真です。ご覧になりますか？」

「はい！」

3人は頭を寄せ合い、ベッドの上に置かれた数枚の写真を見た。
特に今いる寝室の写真を集中的に見たが、いかんせん写真の中の寝

室には死体が写っているので、
どうにも同じ場所とは思えない。
だが、いち早く和彦がソレに気づいた。

「・・・ベッドだ」

「え？」

「ほら、ベッドの掛け布団。はいであるだろ？」

確かに写真の中のベッドは、掛け布団がめくられてある。

それも乱暴に剥ぎ取った、というより、今からベッドに入るからはいだ、という感じである。

「こういうホテルのスイートはきちんとベッドメイクしてるからな
掛け布団をはがすにも、

ちよつと時間がかかる。犯人から逃げてる時に、わざわざそんなこ
としなだろ」

「そうですね。って、ことは犯人はやっぱり・・・」

「だな」

「でも、真紀子さんは仕事一筋で愛人なんていなかったって和彦さ
ん言ってたじゃないですか？」

「ああ」

和彦は頷いた。

寿々菜と武上は和彦の言っている意味がまるでわからない。

「・・・どういうことだ？」

「愛人以外で真紀子と一緒にベッドに入る奴つつたら１人しかい
ないだろ」

「旦那の水沼俊夫、か」

「そうだ」

だが、武上は首を振った。

「確かに水沼は周囲には金があるように見せかけて、実はギャンプルや女につき込んで火の車だったようだ。そこにあの保険金増額。動機はじゅうぶんにある」

武上は手帳を取り出した。

「しかし、アリバイもある」

「アリバイ？」

寿々菜と和彦は声を合わせた。

「事件のあった時間、水沼はS駅近くにいた。2時5分に八代さんから連絡をもらい、

2時15分頃にS駅の駅員にTホテルへの行き方を訊ねている。これは駅員が覚えていた。

水沼が大慌てだったから印象に残っていたようだ。顔写真も見せて確認した」

和彦が「ふーん」と言って頭の後ろで手を組んだ。

「S駅からTホテルのあるT駅まで行こうと思うと1時間かかる。

水沼がTホテルに現れたのが3時15分過ぎ」

武上の直感通り、水沼のアリバイは完璧だった。

「じゃあ、Tホテルで真紀子を殺してからS駅に行ったとしたら？」

「水沼真紀子の死亡推定時刻は1時半から2時。仮に1時半に水沼

が麻里子を殺して、
すぐに電車で飛び乗ったとしてもS駅に2時15分に着くのは不可能だ」

寿々菜は頭の中でカチカチと計算した。
いや、計算なんて大袈裟なものじゃない。
そもそも数字に弱いのだ。

えっと。

S駅からT駅に行くのに1時間かかるってことは、
逆にT駅からS駅に行くのも1時間かかるから、
1時半に電車に乗ったとしてもS駅のつくのは2時半・・・
そっか、確かに無理だ。

だが、和彦は尚も頑張る。

「電車でS駅に行っただとは限らないだろ。車とか」
「・・・外に行こう」

武上が寿々菜と和彦を促した。
二人も素直にそれに従う。

1階のロビーを抜け、正面玄関を出るとそこにはタクシーやシャトルバスが待機していた。

「電車じゃないってことは、これのどれかが、もしくは自家用車に乗ったと言うことだが・・・」

「そうなるな」

「それでも間に合わない。ここからS駅までは車でも1時間はかかる。

混雑した道を通らないといけないからな」

「じゃあ、あれは？」

和彦が顎をしゃくる。

そのすぐ先には高速道路。

確かに高速を使えば下道より遥かに早くS駅につきそうだが・・・

「いや、ダメか」

自分で言うておいて、和彦は首を振った。

「どうしてですか？」

「寿々菜。高速に乗るにはインターチェンジが必要だ。このTホテルに近いインターチェンジはない」

武上が補足する。

「ついでに言うと、S駅の近くにも高速は通ってるけどやっぱりインターは近くにないんです。

だから高速を使っても、2時15分までにS駅からここに来るのは不可能です。

車に羽が生えて高速の途中に飛び乗れば話は別ですが」

もちろんそんなことありえない、

と言うことぐらいいは寿々菜にもわかる（当たり前だ）。

「じゃあやっぱり、事件が起きた1時半から2時の間、水沼はS駅

付近にいたってことか」

「そうなる」

「ってことは、水沼は犯人じゃない？」

「・・・動機はあるがな」

警察としては、水沼犯人説は放棄しかけているようだ。
和彦は武上を睨んだ。

「じゃあ、他に怪しい奴でもいるのかよ？」

「そのことで寿々菜さんに話を聞きたかったんです」

「え？私にですか？」

突然自分の名前が出て、寿々菜は驚いた。
思わず背筋が伸びる。

「はい。寿々菜さんは、1時半から2時の間、八代さんと一緒にいたんですよ？」

「はい」

「片時も離れずに？」

「え？」

寿々菜はその意味が分からなかったが、
和彦の顔は曇る。

「なんだ、それ。景子を疑ってるのか？」

「ええ！？景子さん、真紀子さんを殺したりしませんよ！？」

「可能性の話です。どうです？ずっと八代さんと一緒でしたか」

「はい・・・あ」

「何か？」

「あの・・・和彦さんに会えるって聞いて、私、トイレで化粧直し

とかしてました」

武上の目が光る。

「どれくらいの時間ですか？」

「さあ・・・でも10分くらいだと思います」

「と言うことは、その10分間、八代さんは1人だった」

「・・・はい」

寿々菜は手をギュツと握り締めた。

まさか！

景子さんがそんなことするはずない！

でも、私のこの発言のせいで、景子さんに疑いがかかるようなことになったら・・・

「おい。景子が1人だったってことは、寿々菜も1人だったってことだろ。寿々菜だって疑うべきだ」

和彦の言葉に武上が顔をしかめる。

「和彦は、寿々菜さんが水沼真紀子を殺したと思うのか？」

「思わない。ついでに言うと、景子が殺したとも思わない。でも景子を疑うなら、寿々菜も疑うべきだろ」

和彦の言う通りだ。

武上は頷くしかなかった。

第11話 疑惑

武上が運転する車の中の後部座席で、寿々菜はずっと俯いたままだった。

「寿々菜。俺も武上もお前が犯人だなんて思っただけだ」

「はい・・・」

「ただ、犯行が可能だったかどうか、って話してるだけだ」

「はい・・・」

和彦は寿々菜の横で、ため息をついた。

「・・・なんか食って帰るか」

「え？」

「夕飯は食ったけどな。デザートだ」

「・・・」

もしかして、和彦さん、私を慰めてくれてるのかな？

寿々菜はドキドキしだした。

そうだ。あの「KAZU」がこうやって私の横に座ってるってことだけでもすごいのに、

私に話しかけてくれたり、しかも慰めてくれたり・・・

「KAZU」のファンは全国に数え切れないくらいいるのに、私ってなんて幸せ者なんだろう！

「はい！ケーキがいいです！」

「・・・なんだ、急に元気になったな。おい、武上、Fテレビにやつてくれ」

「俺、運転手じゃないんだけど」

武上がバックミラーで和彦を睨む。

「殺人事件の調査に協力してやってるだろ」

協力と言えるのかどうかは別として・・・

「なんでFテレビなんだ」

「俺、今から仕事なんだよ」

「今から！？もう11時だぞ」

「12時からドラマ撮りだ。それまで下のカフェでケーキ食おうな、寿々菜」

「はい！」

寿々菜の笑顔には、武上も弱い。
仕方なくハンドルを切る。

「でも、10分で人を殺すって可能でしょうか？」

「お。なんだまた急に」

「いえ・・・だって、私と景子さんがいたのって、1階のロビーですよ？」

そこからエレベーターで23階まで上がって、真紀子さんを殺して、また1階に戻る・・・

10分のできるでしょうか？」

「そうですね・・・」

武上も眉をひそめて考える。

物理的に不可能ではない。

だが、エレベーターの来るタイミングが少しでもずれると難しいだろう。

ましてや、どこぞの殺し屋じゃあるまいし、人を殺して10分やそこからで平然と元の場所に帰ってくるなんてできるとは思えない。他にも難しい点はある。

「人をナイフで刺せば返り血を浴びる。着替える時間も必要ですね」「ドラマみたいに、コートをかぶって刺して、そのコートを捨てちゃえば……」

「寿々菜、お前、誰の味方なんだ」

「あ、いえ、なんとなく……」

「確かにその可能性もあります。でも事件の日のホテルとその周辺のゴミは徹底的に調べましたが、

何も証拠になるような物はありませんでした。ナイフに指紋もありませんでしたし」

「そうですか」

景子はそんな荷物も持っていなかった。

なんだ、やっぱり景子さんは犯人なんかじゃないじゃない！

私だって！

「寿々菜と景子、共犯説は……」

「和彦さん。まだそれ言ってるんですか」

「可能性、だって」

「そうになると、根本的に全てひっくり返りますね。でも、僕は寿々菜さんが犯人だとは思えません」

「それって武上の個人的な感想で、証拠になんねーだろ」
「・・・」

「寿々菜。お前本当に水沼の愛人とかじゃないだろうな？」
「ち、違います！私が好きなのは和彦さんです！」

言ってから真っ赤になったが遅い。

でも当の和彦はまるで気に留めず「そっか」と頷くだけ。
言われ慣れてるのだろう。

一方、武上としては・・・当然面白くない。

「んじゃ、景子と水沼が愛人ってのは？」

和彦としては「寿々菜じゃないなら」という程度で言ってみただけ
だったが、
寿々菜は過剰に反応した。

「そんなことあり得ません！だって、景子さんと真紀子さんで同期
で仲良しなんですよ！？」

「だからって、景子と水沼が愛人同士じゃないとは言えないだろ」

「そんな・・・」

「そうですよ。寿々菜さん」

「え？」

武上の思わぬ援護に、寿々菜のみならず和彦も驚いた。

「僕もその可能性がないとは思いません。今、他の刑事が聞き込み
にあたってます」

「そんな!!」

武上が寿々菜に景子のアリバイ確認をしたのは、
そういう考えがあつてのことだ。

まだ証拠は何もない。

だが、もし本当に愛人関係なら、二人でいるところを見たという目撃者がいてもおかしくない。

寿々菜は再び俯き、膝の上で両手を握った。

景子さんが、水沼さんの愛人で、真紀子さんを殺した・・・？

そんなのはおよそ現実的ではない気がする。

10分での殺人劇と言つのも、ドラマじゃあるまいし無理がある。
でも・・・少なくとも、水沼のアリバイほど完璧ではない。

それに・・・

寿々菜は頭を振った。

違う！あれは私の勘違いだ！

そんな寿々菜を和彦はじつと見ていた。

翌日。

景子に無理を言っただけでスケジュールを空けてもらった和彦は再び昨日と同じ場所にいた。

Tホテルだ。

だが、いかにアイドルと言えど、刑事の武上のように簡単に殺人事件現場を見せてもらう訳にはいかない。

そうになると、この目立つ顔は返って邪魔なだけだ。

和彦はキャップを目深にかぶり色の薄いサングラスをしていた。

自分のマネージャーである景子に疑いがかかるのは、和彦とて面白くない。

それに、寿々菜が落ち込んでいるのを見るのも、何故か面白くない。

こんなくだらない探偵ごっこはさっさと終わりにしよう。

仕事だって立て込んでるんだ。

もうすぐ御園探偵の撮影もある。

そう。

本当に忙しい。

真紀子が殺されたのが、オフの日で正直助かった。

唯一突発で入っていた雑誌Mのインタビューもお流れになった。

あれが忙しい日なら、一気にスケジュールが狂い、こんな風に一人で出歩ける時間はもう何日ももらえなかっただろう。

それに、景子の敏腕さには舌を巻くものがある。

和彦がスケジュールを安心してこなせるように全てに置いて段取りが完璧で、

真紀子からは当然なんの引き継ぎもなかったはずなのに、

和彦の全てを把握しているかのように、和彦に何の負担も感じさせない。

あんなマナージャー、なかなかいない。
それを手放さない為にも、早く解決しなければ！

和彦は正面玄関のタクシーとシャトルバスを見渡した。
タクシーは、ホテルが提携しているのか、全て同じ会社のタクシーだ。

もし事件の日に水沼を乗せていれば、聞き込みですぐに分かるかもしれない。
当然警察もそれは行っただろう。

シャトルバスは・・・

和彦は、シャトルバスの行き先を見た。
行き先はT駅、もしくはもう少し先の大きな駅のみ。
S駅はない。
まあ、あつたとしても1時間かかることに変わらない。

1時間。

S駅とTホテルの間の移動時間だ。
これを短縮できれば、水沼が1時半から2時の間に真紀子を殺し、
2時15分にS駅にすることが可能だ。
最短で15分。
最長でも45分。

へりでも使わないと無理だろう。

和彦は何の手がかりもないまま、Tホテルの周りを歩いてみた。まさかヘリポートがあるとも思えないが、思わぬ移動手段が落ちてるかもしれない。

Tホテルは東京とは思えないほど緑豊かな環境にある。実際、他県との境界はすぐそこだ。

交通の便はお世辞にもいいとは言いがたいが、取り合えず小さいながらにT駅はすぐ近くにあるし、タクシーやシャトルバスも充実している。

ホテルとしては普通のホテルだが、都会の喧騒を嫌う客からは人気がある。

このホテルのスイートでインタビューが行われる予定だった。

・・・どうしてこのホテルだったんだ？

スイートは確かに豪華だったが、都心のホテルでも似たような部屋はいくらでもある。

外での写真撮影を予定していた訳でもない。

それなのに、どうして・・・

その考えの行き着く先は、どうしても「水沼のアリバイ作り」である。

和彦としては、水沼犯人説を捨てきれない。動機がある。

ベッドの掛け布団の件もある。

敢えてS駅から遠いTホテルに真紀子がいるように仕向け、真紀子を殺した後、

なんらかの手段でS駅に45分ほどで移動する。

この「なんらかの手段」さえ分かれば・・・

和彦はいつの間にか、ホテルの裏手まで歩いていた。
正面玄関のちょうど反対側だ。

Tホテルはなかなかいいホテルだとは思うが、
「裏側」は所詮こんなものか、と和彦はため息が漏れた。

残飯を入れたゴミ箱やリネン類が所狭しと積み上げられ、
その隅で休憩中らしき従業員が煙草を吸っている。
和彦にも気がついたようだが、「こっちは休憩中なんだ」と言わんばかりに無視を決め込む始末。

ま、確かに俺も客じゃないし。

と気に留めず、和彦は足を進めた。

その時、目の前に小道が姿を現した。
一人が通れるくらいの本当に狭い道だ。
それは山を登って行っている。

ホテルの裏に、どうしてこんな道が・・・

和彦は、誘われるようにその道に足を踏み入れた。

第12話 インタビュー

「バイバーイ」

「また明日ねー」

寿々菜は校門の前で手を振りながら友人と別れた。

寿々菜の通う北原高校はごくごく普通の・・・

いや、成績面と、ついでに言う素行面でもあまり「良い」とは言
いかねる高校だ。

公立高校だから特別に芸能コースなんてしやれた物もない。

一応芸能人の寿々菜だが、門野に「必要があれば芸能コースのある
私立に転校すればいい」

と言われ、普通の高校に進学した。

そして、今のところ放課後や休みの日だけでじゅうぶん仕事をこな
せてしまえているので、
転校の「必要」もない。

高校に入学して半年。そしてデビューして早1年以上。

そろそろその「必要」な時期が来て欲しい・・・

そう思う反面、せっかくできた友達と別れたくない、という思いも
頭ををよぎる。

中学時代ずっと、門野プロダクションに入る為に翻弄していた寿々
菜の成績では、

入れる高校は限られていた。

それでも、北原高校の評判はよくはなかったので寿々菜も躊躇して

いたが、

いざ入学してみると、意外と居心地がよく、友達もたくさんできた。みんな寿々菜のことを応援してくれている。

できればこのままこの高校を卒業したい。

でもって、仕事もいつぱいこなして有名になりたい！

・・・って無理かなあ？

そんな小さな悩みを人知れず抱えながら、家路につく。

が、悩んでいてもお腹は減る。

寿々菜は高校の裏にあるタコヤキ屋でタコヤキを買って近くの公園に入った。

小さな公園だから人目にもつかない。

寿々菜はベンチに座ると、いそいそとタコヤキの蓋を開けた。

仮にもアイドルが1人で公園でタコヤキを食べる・・・

という時点で、まだまだ寿々菜は芸人としての自覚が足りないのかもしれない。

しかしそんな自由奔放さを好いてくれるファンも、少しだがいるのも事実。

寿々菜はタコヤキを口に入れた。

美味しい！！！！

ここのタコヤキ、本当に美味しいんだよね！

和彦さんにも食べさせてあげたい！

・・・和彦さん、今頃何してるだろう？
仕事だよね？

景子さんも一緒かな？

もう一つ、タコヤキを口に入れる。

景子さんは、まさか自分が疑われてるとは思ってないだろう。
そりゃそうよね。景子さんが人殺しなんてするはずないもん。
そう・・・そうだ！景子さんの潔白を証明したい！
でも、そのためにはどうしたらいいだろう？

勘の良さは自分でもちよつと自信がある。

でも、推理とか、熟考とかは最も苦手とするところだ。

寿々菜はしばらくタコヤキに専念し、全て食べ終わって公園を出る
と、

ようやく再び考え始めた。

「ホテルは昨日和彦さんと武上さんに行ったけど、手がかりはなさ
そうだった。

でも、真紀子さんが一緒にベッドに入ろうとしてた相手は水沼さん
以外考えられない。

だけど、水沼さんにはアリバイが・・・

寿々菜は赤信号に引つ掛かり、横断歩道の前で足を停めた。

そういえば、この前の撮影も横断歩道の通行人役だったな。

あの時に水沼さんがホテルから出てくるのを見たんだ。

そして、あの時に感じた違和感。

あれは・・・

寿々菜は自分の考えを打ち消すように頭を振った。

と、横断歩道の向かいに本屋があるのに気づいた。

その壁に「雑誌M 本日入荷！」と書かれた紙が貼られている。

雑誌M？

どこかで聞いたことあるような・・・あ！

そうだ！事件の日に和彦さんがインタビューされるはずだった雑誌だ！

寿々菜は信号が青になると同時にその本屋へ向かって駆け出した。

本屋に入ると、雑誌Mが平積みされている。

この来月号に和彦さんが載るはずだったのに・・・

お流れになっちゃうなんて、もったいない。

寿々菜は和彦の出ている雑誌は全てチェックしている。

だから雑誌Mに載るのが今回初めてだということもすぐにわかった。もつとも、雑誌Mなんて今まで興味を持ったことはなかったが・・・

どんな雑誌なんだろう？

寿々菜は雑誌Mを手にとるとパラパラとめくってみた。

・・・え？何、この雑誌。

寿々菜は思わず固まった。

そこに書かれた文字は全て寿々菜の理解の範囲を超えていた。

「デフレスパイラルで・・・」

「日経平均株価が・・・」

「〇〇に対してTOBが行われ・・・」

「M&Aの結果・・・」

それがいわゆる「経済誌」ということくらいは、

寿々菜にもかろうじてわかった。

だが、そんなものにどうして和彦のインタビューが載る予定だったのかさっぱりわからない。

寿々菜は注意深く雑誌のページを進めた。

その中には、確かに著名人のインタビューコーナーのページがあった。

恐らく和彦も来月号のここに載る予定だったのだろう。

最近では、芸能界でも株やデイトレードに興味がある人は多い。

そういう人がここでインタビューされることもあるだろう。

しかし、KAZUファン暦6年の寿々菜の知る範囲では、

KAZUが経済に興味があるなんて話、聞いたことがない。
いや、KAZUがそう公表していないだけで、実は「和彦」はその
手のことに詳しいかもしれない。

だが、寿々菜の印象では、KAZUは「アイドルはアイドルの範疇
を超えない」という考えを
持っているように思う。

だからそれ以上の仕事もそれ以下の仕事もしない。

真紀子だってそれくらい分かっていたはずだ。

それなのに、どうして雑誌Mのインタビューなんてすることになっ
たんだろう。

しかも、和彦の話では、インタビューは門野プロダクション側から
持ちかけたと言う。

とまあ、ゴタクを並べれば切りがないが、
寿々菜はそんな深く考えたわけではなく、単に、
「KAZUと経済誌M」という組み合わせに激しく違和感を覚えた
だけだった。

これは！

これは、助手の出番だわ！

寿々菜は雑誌Mをカウンターに持って行き・・・

それが月間誌で意外と高いことに気づき、

裏表紙に書かれてある発行元の住所を頭に叩き込むと、

雑誌を元の場所に丁寧に置いて店を出たのだった。

第13話 証言

雑誌Mの発行元の住所を、頭に叩き込んだ、
と、言うのは正確な表現ではなかった。

雑誌M自体はその存在すら寿々菜は知らなかったが、
発行している出版社は、アイドル系の雑誌も出している大手出版社
で、

寿々菜もよく知っている所だった。

いや、よく知っているどころではない。

寿々菜がデビューする時、「今月の新人！」というコーナーで寿々
菜を取り上げてくれた雑誌の出版社だったのだ。

お陰で寿々菜は住所に頼ることなく、その出版社に辿り着くことが
できた。

そして、大きな大きなロビーに気後れしながらも、
受付で寿々菜にインタビューしてくれた記者を呼び出してくれるよ
うに頼んだ。

確かあの男の人、高橋さんって言ったなあ。
覚えててくれるかな？

覚えていないだろう。

何も「高橋さん」が悪いわけじゃない。

毎月毎月「今月の新人！」にインタビューしていれば、

そんな1年以上も前に一度インタビューしただけの駆け出しアイドル

ル・・・しかも未だにパツとしない・・・のことなんて覚えている
と言う方が、無理である。

案の定、「高橋さん」は、ボサボサした頭を掻きながら、
「白木寿々菜？スウ？はて、誰だっけ？」と思いながらロビーに現
れた。

が。

「ああ！君か！」

寿々菜を見た高橋は、ポンと手を打った。

「高橋さん！覚えてくれてたんですね！」

「当たり前だろ、君みたいなの・・・かわいい子」

本当は「面白い子」と言いたかったのを瞬時に「かわいい子」に置
き換えられたのは、
長年、アイドル誌に携わった高橋だからこそできた技だろう。

「嬉しいです！」

「ああ・・・うん。印象的だったからね」

寿々菜のインタビューの際、水着姿をワンカット載せたいから水着
を持参してくるようになり、
と高橋は言ったのだが、寿々菜が持ってきたのはなんとスクール水
着だった。

しかも、本当に中学校の授業で使っていた物らしく、
ご丁寧に胸の部分に「白木」と言う手書きのゼッケンまで縫いつけ
られていた。

もつとも、「これはある意味いけるかも！」という高橋の直感で、さすがにゼツケンは外したが、スクール水着姿の寿々菜が雑誌に載ることになった。

まあ、「いけた」かどうかは定かではない。

「久しぶりだね。頑張ってるみたいじゃないか。今日はどうしたの？」

「はい、あの。雑誌Mの方にお会いしたいんですが」
「雑誌M!？」

高橋の声が1オクターブ上がる。

「寿々菜ちゃん、雑誌Mってどんな雑誌が知ってるの？」

「はい。なんだか難しい雑誌ですよ」

「そう、経済誌だよ？」

「はい。あの、そこにうちの事務所のKAZUさんが載ることになったんですけど・・・」

あ。

どうしよう。

なんて言うか考えてなかった！

まさか、殺人事件の調査で、なんて言えないし・・・
えっと、ええっと・・・

「あ、あの、ちょっとこっちの事情でお流れになっちゃって、それでお詫びを・・・」

「寿々菜ちゃんが？」

「はい！」

「ふーん・・・なんか、やらしいこと要求されてるとか？」

「ち、違います！私が自分からお詫びに来たんです！」

「インタビューが流れるなんて、よくあることだから気にしないでいいよ。」

ましてや、自分を差し出すなんて・・・」

「だから違いますって！お願いです、担当者の方と会わせてください！」

高橋は腕を組んだ。

人の良い高橋だ。寿々菜を疑った訳ではない。

本当に寿々菜が「自分の体でお詫びを」とか言い出さないか心配しているのだ。

「いや・・・心配ないか。わかった、ちょっとここで待ってて」

高橋は思いついたようにそう言うと、エレベーターの中へ消えた。

そして10分後。

再び降りてきたエレベーターの中から、1人の人物が現れた。

「お待ちせしました。白木寿々菜さんですか？」

「は、はい！」

「はじめまして。畠山です」

「はははじめまして」

寿々菜は慌ててロビーのソファから立ち上がり、「気をつけ！」をした。

その人物は、相手に無意識にそうさせてしまう雰囲気を持っていた。

さすが、経済誌の記者、と言つか・・・

さっきのボサボサの高橋とは雲泥の差である。

いや、それ以前に性別が違う。

ビジネススーツを完璧に着こなし、膝より少しだけ上のスカートの裾からは綺麗な細い足が伸びている。髪はきつちりと後ろでまとめ、化粧は薄いが抜け目ない。

眼鏡の奥の瞳は少し冷たい印象を与える。

「知的美人」の金型だ。

「あの。先日は、うちの事務所の和彦さ・・・あ、KAZUのインタビューが流れてしまい、申し訳ありませんでした・・・」

言いながら、寿々菜は照れた。

『うちの事務所のKAZU』だって！

私ってば、いつの間にかこんなにKAZUに近い人間になってる！！

寿々菜の勘違いはさて置き。

その言葉を聞いた畠山女史は眉をひそめた。

「白木さんは・・・タレント？」

「はい！スウって言います」

「この前の件なら、そちらの門野社長から既にお詫び頂いてるわ。

あなたみたいな一介のタレントが、

わざわざ謝り来る必要はないと思うけど？」

す、鋭い。

寿々菜はひるんだ。

だが！ここで引き下がる訳にはいかない！

「お聞きしたいことがあります!」

「聞きたいこと?」

畠山女史が眼鏡を直す。

「はい。KAZUのインタビューは、うちから話があったんですよ?」

「そうよ。自分のところのタレントが経済にも興味あるってことをアピールしたいってね」

「そうですか……。そのお話は誰からありましたか?」

「ええっと……。確か、水沼さんと言う女性よ……。あら?確かあの日亡くなったのって、

その水沼さんて方じゃなかったかしら」

「……。はい」

やっぱり真紀子さんが進めてた話なんだ。

じゃあ、その理由は真紀子さんしか知らない訳で……

無駄足だったかな、と寿々菜は落ち込んだ。

さすがの畠山女史も、たださえでも幼く見える寿々菜がしょんぼりしているのを不憫に思ったのか、付け加えた。

「残念だったわね。私は結局お会いできなかったけど、電話だとしてしっかりした印象のマネージャーさんだったのに」

「はい。ありがとうございます」

「時間と場所の確認を何度もされたわ。KAZUさんはスケジュールが詰まってるからって」

「・・・え」

寿々菜は顔を上げた。

「あの日はKAZUの仕事はあのインタビュー一本だったんですけど」

「そうなの？でも、録音じゃあ・・・」

「録音？」

「ええ。うちの会社は、インタビューとかの時間や場所に関する電話は、録音してあるの。」

万が一行き違いがあったりした時に、『あっちがこう言った』『そっちがそう言った』なんて

水掛け論にならないためにね」

「じゃあ、真紀子さん・・・えつと水沼さんとのやり取りも録音してあるんですか？」

「ええ。消してなければまだ残ってるはずよ」

「聞かせてもらえませんか!？」

聞いてどうする、とか考えていた訳ではない。

でも、もしかしたら真紀子が雑誌Mにインタビューをしてほしいと依頼した理由が分かるかもしれない。

畠山女史はさすがに少し迷惑そうにしたが、そんなことに全く気づかない寿々菜の勢いに負けた。

「これだわ。よかった、消えてなかった」

「ありがとうございます!」

「ここで聞く？」

「はい！」

寿々菜はアナログな小型テープを電話にセットし、再生ボタンを押した。

しばらくの静寂の後・・・

「はい。雑誌Mの担当デスクです」

「こんにちは。私、門野プロダクションの水沼と申します。畠山さんは・・・」

プチ。

寿々菜は停止ボタンを押した。

「あら。もういいの？」

「はい・・・」

それ以上、聞く必要はなかった。

寿々菜はテープを貰い、重い足を引きずりながら出版社を後にした。

第14話 アリバイ崩れる

「はい、OK！よかったよお！お疲れ様！」

ほんとかよ？

そう突っ込みたかったが、ディレクターがOKと言っているのだから、

和彦も敢えて何も言わず、笑顔で「ありがとうございました」と言った。

「KAZU」はこういうところでも本当の顔は見せない。
あくまで営業スマイルだ。

和彦は歌が好きじゃない。
下手という訳ではない。

商品にできる程度には上手いと自分でも思う。

ただ、「人前で歌う」という行為自体が好きじゃない。

でもこれも仕事だ。

和彦は演技をしているつもりで、なんとか歌いきり、ヘッドフォンを置いた。

「うんうん。今までで一番いいデキじゃない？」

「ほんとですかー？」

「ほんと、ほんと。デビュー以来ずっとKAZUの歌を聞いている俺が言っただから間違いないし！」

どこまで本気が分からないが、ディレクターの大概がニコニコと請

合う。

大槻はその言葉通り、和彦がデビューしてからずっと和彦の音楽方面の面倒を見てくれてきた。

一見、どここのチンピラですか？と言う風貌なのだが、その音楽の才能には目を見張るものがある。

それに、歌手を「ノせる」のが上手い。

あれこれ注文をつける訳ではなく、それでいて自分の思い通りに楽曲を仕上げる。

和彦も信頼を置いていた。

「KAZU。そう言えば、こないだ頼んだやつ、書けた？」

「こないだ？」

「あー、やっぱり忘れてるな？今度の御園探偵で使う曲の詩を書いているって頼んだでしょ？」

姿に似合わず女っぽい言葉遣いだ。

「・・・あー・・・そういえば」

「そういえば、じゃないよー。別れをテーマにしたやつ。早めに頼むよ！曲もつけないといけないし」

「はい。今週中には」

「頼むよ」

作詞。

これも和彦にとって苦手な仕事の一つだ。

大槻としては曲も和彦に作って欲しいのだが、

さすがに素人には難しいし、和彦の多忙さを考えると無理も言えない。

実際、今既に時計はてっぺんを過ぎている。

だが、「作詞・KAZU」と言う文字がCDに入るか入らないかで、売れ行きが全然変わってくる。だからこれだけは頑張ってもらいたいのだ。

和彦もそれは分かっているが、いかんせん時間がない。得意でもない。

そういう訳で、今までは真紀子と一緒に作ったり、時にはほとんど真紀子作り、和彦が少し手を加えて「作詞・KAZU」としていた。

でもその真紀子はもういない。景子にそこまで頼めるだろうか？

・・・いや、頼めない、だろう。

「そういえば、新しいマネージャーさんは？八代さんだった？」

「今日は別の仕事があるとかで、事務所に戻りました」

「へー。KAZU以外も見てるんだってね。殺人的だねー」

「そうですね。お陰で僕もだいぶ放置されてます」

「ははは、可愛い子には何とやら、だね。お疲れ様。タクシーで帰る？」

「いえ。知り合いが迎えに来てくれるんで。お疲れ様です」

和彦は涼しい笑顔でそう言い、スタジオを後にした。

そして・・・その「知り合い」は仏頂面で運転席にいた。

「おー。待たせたな」

すっかり「KAZU」の仮面を脱いだ和彦が、気軽に声をかける。

「俺、運転手じゃないって言っただろ」

「お前も俺に負けず劣らず、2重人格だな。寿々菜の前では『僕』とか言うくせに」

武上がふんつとそっぽを向く。

まともに和彦の相手をしてるだけだと学んだらしい。

「そう怒るな。寿々菜もつけてやるから」

「・・・こんな夜中に寿々菜さんを・・・未成年を連れ出す訳にはいかない」

「そーか？じゃあ、寿々菜は抜きだ」

「・・・やっぱり寿々菜さんも呼ぼう」

何が悲しくて和彦と二人で深夜にドライブなんぞしないといけないんだ！！！！

和彦が電話すると、寝ぼけた寿々菜は最初あまり理解できない様子だったが、

「今から迎えに行く」の一言で覚醒したらしい。

「分かりました！」と大喜びの声。

尻尾を振っている姿が目につく。

そんな愛犬(?)を覆面パトで拾い、向かうは一路Tホテル。

「って、またTホテルか？何の用があるんだ？」

「ちょっと見せたい物があつてさ」

「見せたい物？」

「寿々菜、眠いだろ？寝てていいぞ。肩、貸してやる」

「そ、そ、そんな・・・恐れ多いです」

真つ赤になる寿々菜を見て和彦はクックククと笑い、武上はムスツとする。

とまあ、陰悪なムード満載のまま、小一時間後には車はTホテルの駐車場にいた。

「こつちだ」

和彦はホテルの裏手へ向かった。

「2303室じゃないのか？」

「いいから」

寿々菜と武上は首を傾げながら和彦の後ろに続く。

和彦が目指しているのは、もちろん例の小道だ。

「・・・なんか、真つ暗で物騒ですね」

「ホテルの裏だからな。でも昼間は別の意味で物騒だぞ」

和彦は、先日見たあの頂けない光景を思い出しながら言った。

「ほら、これだ」

「なんだ？真つ暗でよく見えない」

「ライト出せ」

「ドラえもんじゃあるまいし。警察だからってなんでも持つてる訳

じゃない」

「御園英志はいつもペンシルライトを持ち歩いてるぞ」
「・・・」

武上も空想の探偵に負ける（？）訳にはいかない。
急いで車に戻り、懐中電灯を持ってきた。

「懐中電灯って・・・今時」

「うるさい！で、何だってんだ？」

和彦はとにかく懐中電灯を取り上げた。

「ここに道があるだろ？」

「・・・ああ」

「行くぞ」

和彦はまたスタスタと歩いて行く。

「寿々菜さん、先にどうぞ。僕が一番後ろを行きます」
「あ、すみません」

寿々菜は和彦の後姿を見失わないように、小走りで追いかけた。
すぐ後ろに武上が続く。

左右も前も黒い木々で覆われていて、一体どこへ向かっているのか
検討もつかない。

寿々菜は、なんだかお化けが出てきそう・・・と本気で怖くなった。

と。突然目の前の木がなくなり、視界が開けた。
同時に眩しい光がいくつも目に入り、騒音が耳を突く。

「・・・え？」

「なんだ、ここ」

「見りゃわかるだろ」

確かに見りゃわかる。

深夜にも関わらずたくさんの車が凄いスピードで行き交っている。
ここは・・・

「高速道路？」

「そうだ」

そう。

そこはホテルのすぐ近くを通る高速道路だった。

「武上。お前この前、『車に羽が生えて高速の途中に飛び乗れば』
とか言ってたろ？」

さすがにそれはないが、水沼はここから高速に乗ったんだよ」

「いや、無理だろ。今の道は車じゃ通れない」

武上は首を振ったが、和彦はニヤッと笑った。

「誰が車をつつた。歩いて、だよ」

「歩いてここまで来て・・・ヒッチハイクでもしたのか？」

「まさか」

和彦は、今度は目の前の階段を降り始めた。

そして、それはすぐに姿を現した。

「高速バスのバス停!？」

「そうだ」

「・・・そうか！でも、ホテルの従業員に話を聞いた時、こんなのがあんなって話はでなかったぞ？」

「あの小道はホテルの裏側にあるからな。ホテルとしてもあまり客にあの道を使って欲しくないから、

ホテルへのアクセス方法として公式には宣伝してないんだろ。もしかしたら下っ端の従業員は、

本当に知らないのかもしれない」

「なるほど・・・」

武上は駆け出し、時刻表にかじりついた。

「バスは30分に1本・・・午後1時40分にバスがある！」

「だろ？途中の停車駅に『S駅前』つてのもある」

「和彦さん！すごい！」

「まーな」

「・・・」

武上も刑事としてここは和彦に礼の一つも言うべきなのだが・・・分かっていても、和彦に頭を下げるのはどうも気が進まない。

「お。ちょうど最終バスが来たぞ。乗ってみるか」

「ああ」

寿々菜はワクワクが止まらなかった。

こんな鮮やかに、アリバイを崩してしまうなんて！！
和彦さん、やっぱりかっこいい！

すっかり和彦に惚れ直した寿々菜を含め、
3人とも駐車場に停めた覆面パトのことはすっかり忘れてバスに乗り込んだ。

第15話 どっち？

「はあ・・・」

「武上さん。元気出してください」

「寿々菜さん・・・ありがとうございます。でも、和彦に頼らず僕がもっと早く気づいていれば・・・」

いや、和彦に頼ったつもりはないんですが」

そう言いながら、武上は肩を落とした。

ここは、S 駅近くの高級マンション・・・の1室。

水沼の家だ。

もともと既に、その家の主はこの世にはいない。

「水沼さん・・・死んじゃったんですか？」

「はい。ここは8階ですからね。飛び降りれば助かりません」

昨日・・・いや、正確には今日、3人であの高速バスに乗り、Tホテルから30分きっかりでS駅に着くという事を実地検証し、喜んでいた矢先、水沼が自殺したという連絡が武上の上司の三山から入った。

そして、仕事だという和彦を置いて（一体どういう生活をしているのやら）、

寿々菜と武上で駆けつけたのだ。

さっきまで、水沼のアリバイが崩れて喜んでいた武上だったが、

一気に地獄に叩き落された気分だ。
もっとも、何故か和彦と寿々菜は、最初からすっきりした様子ではなかったが……

「武上さん。これを」

鑑識の人間が1枚の紙を差し出した。

そこにはプリントされた文字で、

自分が妻の真紀子を殺したということ、

高速バスを使つて、TホテルからS駅に行き、アリバイ工作をした
ということが書かれていた。

遺書と言うより、詫び状のような感じだ。

「これはどこに？」

「机の上です。パソコンで打ってプリントアウトしたみたいですね」

「パソコン？」

寿々菜には、武上の疑問がすぐにわかった。

「武上さん。それは不自然じゃないです。水沼さんは、自分は字が
汚いからって、

ちよつとしたメモ以外はいつもパソコンで打ってたんです」

「そうなんですか」

でも、だからこそ他の人間が水沼さんの振りをして打つこともでき
ますけどね、

と、言いかけて寿々菜はやめた。

「なんだ。水沼夫妻は仲良く天国か」
「社長！」

相変わらず飄々とした門野が姿を現した。

「一方は地獄かもしれませんけどね」
「地獄？」

武上はさっきの紙を門野に見せた。

「ほう。じゃあ、真紀子を殺したのはやっぱり水沼か」
「そのようです」
「で、水沼は自殺？」
「はい。申し訳ありません。もう少し早く分かっていれば・・・」
「自業自得だろ」
「そうですか」

門野の淡々とした調子のお陰で、何故か武上も調子が戻って来た。

「そう、自殺です・・・でも、どうしてだろ」
「武上さん？何かおかしいんですか？」
「僕達が水沼のアリバイが嘘だと気づいたのはさっきです。だから水沼はそんなこと知らないはずですよ。」
「それなのに、どうして水沼は自殺しようと思ったんでしょう？」
「この紙に書いてある通りじゃないですか？『罪の意識に耐えられなくなつた』って」
「そんなタマじゃない」

「そんなタマじゃないでしょう」

門野と武上がハモツた。

「い、いえ」

武上が咳払いする。

「取調べの時の感じだと・・・とても自殺するような人間には見えなかったもので」

それは寿々菜にも納得できた。

妻が殺された直後に別の女とホテルに行くくらいの男だ。

死んでも自殺しよう（？）とは思わなさそうだ。

門野も頷く。

「自殺するくらいなら会社の金を着服して逃げるだろうな、あいつなら。」

真紀子の保険金すら受け取らないまま死ぬなんて、らしくない」
「・・・」

死んだ人間を悪く言うのはどうかと・・・と、武上は思ったが、これも自業自得だろう。

それに水沼は自殺ではないという決め手も今のところなさそうだ。

「他殺の可能性がないか、丁寧に調べてください」

武上は鑑識にそう言う他なかった。

「申し訳ありませんでした」

水沼の死から数日後。

三山と武上が揃って門野プロダクションの社長室へやってきた。まだ捜査は終わっていないものの、門野に水沼の自殺を侘びに来たのだ。

もちろん、水沼の死自体は警察の責任ではないが、もう少し早く真紀子の事件を解決できていれば、水沼を自殺させずにすんだかもしれない、と思うと、やはり個人的にも一言侘びておきたいのだろう。

部屋の中には、二人の刑事と門野の他に、寿々菜、和彦、景子、それに秘書の山崎がいた。

「気にするな。元々は真紀子を殺した水沼が悪い」

「はい」

社長の門野がそう言うなら、警察はそれ以上謝る必要もない。三山と武上はホッとした。

「しかし、和彦。お前の推理も大したものだな。水沼が生きていれば特番を組みたいところだったが・・・」

「あれ？組まないのかよ？」

門野がしたり顔で頷いた。

「犯人のインタビューが取れないなら、インパクトは激減だ。下手をすれば、和彦が水沼を死に追いやったなどという意見も出かねないからな」

「ふーん」

「あの・・・では、失礼します。まだ事後処理が色々ありますので」

三山と武上が腰を上げようとした時。

「ちょい待ち」

和彦がそれを制した。

「せっかく何回も丁ホテルに足運んだりしたのに、約束の特番もないじゃ割りに合わない」

「合わないと言っても・・・」

「犯人が生きてりゃいいんだろ？」

「え？」

その場の全員がそれぞれに顔を見合わせた。

「でも、水沼は死んだんだぞ？」

武上が言う。

「水沼はな」

「水沼が犯人じゃないって言うのか？」

「いや」

和彦は1拍置いて付け加えた。

「実行犯は水沼だ」

寿々菜は無意識に目を瞑った。

言わないで、和彦さん！

「・・・他に共犯者がいる、と？」

「無理なんだよな」

「え？」

「武上。お前が言ったんだぞ？人を殺したら返り血を浴びるから、着替えたりしないといけないって」

「・・・言った」

武上は要領を得ない。

「１時半に景子と真紀子が電話で話した直後、真紀子は夫の水沼をベッドに誘い、もしくは誘われ、寝室に行く。そして・・・」

和彦は携帯を取り出し、ナイフに見立てて寿々菜の左胸を刺した。寿々菜はようやく目を開き、思わず「うっ」とか言ってみる。

「お。ちょっとは上達したんじゃないの？ま、それはさて置き。ベッドの上で真紀子を刺し、

着替えるか、あらかじめ着ていたコートを脱ぐかして、急いで部屋を出る」

「ふむ」

「あんまり全力で走ったら目立つだろうけど、そこそこ急いでエレベーターで1階に下り、ホテルを出て裏手の小道を登って高速のバス停へ行く。さて問題です。」

水沼が乗ったバスは何時ののだ？」

「1時・・・40分。水沼の遺書にもそれに乗ったと書いてあった」
「実際、2時15分にはS駅にいたんだから、1時40分のバスに乗ったんだろうな。」

「つて、乗れるか？人を殺して、23階から1階まで下りて、バス停に行く。10分しかないんだぞ」

「・・・確かに」

「1時半きっかりに部屋を飛び出せば、間に合うだろうけどな」

三山が腕を組む。

武上は渋い顔で訊ねた。

「何が言いたいんだ？」

「1時半には、既に真紀子は殺されていて、水沼はいつでも部屋から出られる状態だったんだよ」

「でも、真紀子は1時半に八代さんからの電話に出てる」

「証拠は？」

「八代さんの携帯には発信履歴が、水沼真紀子の携帯には受信履歴があった」

「履歴だけだろ。会話したって証拠はない」

「だって、それは八代さんが・・・」

言いかけて、武上は景子を見た。

三山と門野、山崎の視線も同じ方向を向く。

寿々菜だけは、和彦から目を離さない。

そして、景子は・・・何事もなかったように、前を向いたまま和彦の次の言葉を待っていた。

「寿々菜。寿々菜は景子が真紀子と携帯で話しているのを見てるな？」

「・・・はい」

「でも、景子が切れた携帯に向かって一人で話していたってことはわからなかったんだ」

「・・・そうか！水沼真紀子の死亡推定時刻は1時から2時だ！

1時半には既に殺されていて、水沼俊夫が八代さんからの電話を取つてすぐに切り、

部屋を出たんだ！」

「景子は、その時水沼が真紀子を殺したのを知り、水沼をかばって一人芝居をしてやった。もしくは」

ずっと三山と武上に向かって話していた和彦が、
ようやく景子の方を見た。

「最初から、水沼が真紀子を殺したのを知っていた、か」

第16話 もう一つのインタビュー

「景子。どっちだ？」

和彦は訊ねた。

それは、自分は答えを知っているが、敢えて景子に選ばせようとしているように、
寿々菜には聞こえた。

だから寿々菜は沈黙を守った。

「どっちだと思う？」

景子はまるでナゾナゾでも楽しんでいるかのよう。

「さあ。俺はどっちでもいいと思うけど？」

「お、おい！罪の重さは全然違うんだ！八代さん、正直に・・・」

「なら、前者、と言っておくわ」

「・・・」

実際に真紀子を殺したのは水沼だ。

それを景子が事前に知っていたかどうかは、景子のみぞ知る、言ったところか。

「和彦は、どう思うの？」

「俺は、後者だと思う。でも証拠はない」

「どうして後者だと思うの？」

和彦は頭の後ろで手を組み、ソファに腰を降ろした。

長い足をもてあまし、仕方なくそれも組む。

「俺の仕事が順調だから」

「え？」

「専属のマネージャーが死んだつてのに、俺の仕事は今まで通りスムーズだ。

まるで事前に景子が俺の仕事を把握してたみたい」

「・・・」

「それに事件当日にしたつて、どうでもいいインタビューが一件入つてただけで、他にはなし。

お陰で、ほとんど誰にも迷惑がからなかった」

景子がふふん、と言う感じで笑う。

「人を殺す時まで俺の仕事に気を使うなんて、いかにも景子らしいな、と思つて」

「それはありがとう。でも、和彦の言う通り、なんの証拠もないわ」

「そう。ない。だから、景子は何も知らなかったつて言っておけば？」

「そうね」

「でも」

「でも？」

和彦は寿々菜の手を引いた。

寿々菜は座っている和彦の真横に立つ形になった。

「寿々菜はさつきから何か言いたそうだぞ」

「スウ？」

「寿々菜さん？」

景子と武上が同時に声を出す。
寿々菜は思わず赤くなった。

「い、いえ、何も」

「寿々菜。お前、俺の助手するって言っただろ。何か知ってるんだつたら言えよ」

かなり長い沈黙の後、寿々菜は覚悟を決めてバックからあるものを取り出した。

「それは・・・なんですか？」

「雑誌Mから借りてきた、電話の録音テープです。真紀子さんと雑誌Mの担当者の人の会話が入ってます」

「え！？」

「スケジューリングの電話なんかは録音してあるそうなんです」

寿々菜は、社長デスクにある電話でそれを再生した。

「はい。雑誌Mの担当デスクです」

「こんにちは。私、門野プロダクションの水沼と申します。畠山さんはいらつしゃいますか？」

「私です」

「あ、失礼いたしました。来週のKAZUのインタビューの時間と場所なのですが、

Tホテルの2303室に2時15分にいらしてください」

「2時15分ですね」

寿々菜はテープを止めた。

「事件の後、ロビーで皆さんと話をしていた時に私なんだか違和感

を感じたんです。

一つは、和彦さんの仕事がその日1つしかないということ。もう一つは、真紀子さんが、

『2時に2303室に来て』と言ったことだったんです。

インタビュアーは2時半からで、和彦さんはいつも遅れて来るって言うてました。

そして実際、遅れてきました。真紀子さんだって、和彦さんのそんな癖は知っているはずですよ。

それなのに、和彦さんがいるはずもない2時に部屋に來いだなんて、変だと思ったんです」

和彦は、笑顔で「へー」と言った。

「景子。俺の癖を見抜けてなかったな」

景子は少し和彦を睨んだ。

「それに」

寿々菜はテープを取り出した。

「真紀子さんにも景子さんにも会ったことのない畠山さんには分からないと思いますが、

この声は真紀子さんじゃありません。景子さんです」

「え？」

「似せてるから分かりにくいですけど。雑誌Mのインタビューをセッティングしたのは景子さんです」

「あ、そう言えば！」

和彦が組んでた足をほどいて、前のめりになった。

「事件の前の日に、俺、景子から『明日2時半からインタビューが急に入ったから、Tホテルに自分の足で来て欲しい、って真紀子から伝言よ』って言われたんだった・・・」

「和彦！そーゆー大事なことは、すぐに言えよ！」

武上が和彦を睨む。

「いやー・・・すっかり忘れてた。ってことは、真紀子は本当にインタビューのことは知らなかったんだな？大方、旦那にホテルのスイートで過ごそうとか言われて、そのつもりであそこにいたんだらう。」

でなきゃ、真紀子が仕事前にベッドに入ろうとなんてしないもんな」

そういやそうだ、とか何とか言いながら、和彦は1人で頷いた。
そんな大切な情報を本人の意図はともかく、隠し持ってるとはさすが（？）探偵。

「八代さん」

三山は景子の前に歩み寄った。

「和彦君と寿々菜さんが言ったことは全て憶測ではありますが、筋は通っています。」

それに、このテープ。声紋鑑定に回させてもらいます」

「・・・はい」

「署まで、ご同行願いますね？」

景子は逆らわなかったし、
結果的にその場に居た誰もが引き止めなかった。

だが、その心中は様々だ。

和彦は何か言おうとしたが、口をつぐんだ。

門野は相変わらず「勝手にどうぞ」というスタンスだ。もちろん秘書の山崎も何も口出ししない。

そして寿々菜は・・・武上たちと共に部屋の出口に向かおうとした景子の服を後ろから引っ張った。

「景子さん・・・ごめんなさい」

「何言ってるの。謝るのはこっちの方よ。あの日の2時に、どうしても誰かに真紀子を見つけてもらわなくちゃいけなかったから・・・変な役回り押し付けちゃって、ごめんなさいね。」

でも、まさかこんなテープがあるなんて思わなかった。しかも、寿々菜が見つけてくるなんて。

本当に、探偵の助手みたいね」

景子は、まるで今から仕事にでもいくかのようないつもの笑顔だ。

「社長も、ご迷惑をおかけしてすみません・・・あ、私のインタビュー、今から取つときですか？」

「心配には及ばん。取ってある」

門野はそう言つて、机の下からボイスレコーダーを取り出した。

「げっ。なんだ、それ」

和彦が顔をしかめる。

「いつどこでどんなことがあるかわからないからな。こついう物は

いつも持ち歩いている」

「ふふふ、さすが社長ですね」

「当然だ」

「安心しました。・・・では、失礼します」

景子は丁寧にお辞儀をすると、部屋を出て行った。

第17話 ライバル？

「じゃあ、水沼さん・・・夫の方は、景子さんが殺したんですか・・・」

もしかしたらそうかもとは思っていたが、寿々菜は落ち込んだ。

「はい。水沼真紀子殺害の実行犯、水沼俊夫は被疑者死亡のまま書類送検。

水沼真紀子殺害の共謀と、水沼俊夫殺害の罪で八代景子は逮捕、です」

武上は、敢えてビジネスライクに言ったが、やはり心苦しい。寿々菜が絶大な信頼を寄せていた景子を逮捕したのだから。

景子は、任意同行されたその日に全ての罪を認めた。

水沼真紀子殺しについては、高速バスのバス停が近くにあるTホテルでの寿々菜の仕事が決まった時に、

景子はそのシナリオを思いつき、水沼俊夫と一緒に実行した。

水沼俊夫殺害については、和彦に「事務所へ行く」と嘘を言い、水沼の自宅へ行き犯行に及んだということだった。

「景子さんと水沼さんが付き合ってたなんて・・・意外です」

「そうですね」

「・・・」

水沼が女とホテルから出てくるのを見たときに感じた違和感。

あれは、水沼と女に対しての違和感ではなく、景子の嫉妬の視線に對してだったのだ。

寿々菜は頭のどこかでそれに気づいていたが、気づかない振りをしていた。

「水沼と一緒にいるために真紀子殺害の片棒を担いだと言うのに、あつさり浮気されて、八代さんもやりきれなかったのでしょうか。でも、八代さんは水沼とああいう関係になったことには、後悔してないようです」

景子は今や犯罪者なのだから、刑事の武上は「八代さん」なんて呼ばなくていいのだが、そう言ってしまうのが武上という人間だ。

「男と女ってわかりませんね。景子さんならもつと素敵な男の人がいくらでもいたはずなのに。でも、水沼さんがああいう男の人だからこそ、景子さんも惹かれたのかなあ・・・」

「お。寿々菜。お前にしちや珍しく大人な発言だな」「か、和彦さん！」

寿々菜は慌ててパイプ椅子から立ち上がった。

ここは、御園探偵の撮影スタジオ。いよいよクランクインしたのだ。

「なんで武上がここにいるんだよ」

「寿々菜さんに、話を聞きにきたんだ」

「こんなとこまで？ 大方寿々菜が仕事してるところを見たかったんだろ」

武上がグッと詰まる。

「ま、どーでもいいけど。おい、寿々菜。次、お前の出番だぞ」
「はい！頑張ります」

寿々菜はスタンバイすべく、セットの中へ駆け出した。

「おい、和彦。寿々菜さんって何の役なんだ？」
「死体」

「は？」

「しかも、メインの被害者役じゃなくて、『偶然犯行現場に居合わせて、口封じの為に殺された中学生』役」
「・・・」

まあ、「スウ」だとこの程度だ。

「よし、俺も行くかぁー」

「なあ」

背伸びをして踵を返した和彦を、武上が呼び止めた。

「水沼真紀子が殺された時に部屋にあった『さよなら』とだけ書かれた遺書らしき物はなんだったんだ？」

「・・・そんなの知るか。警察の仕事だろ、自分で解決しろよ」

「・・・和彦、お前なんか心当たりがあるだろ？」

「ないない」

和彦はそそくさと立ち去った。

まさか武上に、「あれは俺の代わりに真紀子が歌詞を作ってたんだ」とは、

口が裂けても言えない。

しかしその歌詞のテーマが「別れ」とは、なんとも皮肉なことか。

セツトの中に立つ和彦の横に、1人の男が駆け寄った。

門野の秘書の山崎だ。

いや、元秘書、と言うべきだろう。

いつものスーツ姿だが、男前っぷりが上がったように見えるのは武上の気のせいではあるまい。

水沼真紀子と八代景子が抜けた穴は大きく、

門野は当分秘書は置かないことに決め、山崎を和彦の専属マネージャーにした。

今までずっと女のマネージャーしか経験したことのない和彦は大いに文句を言ったが、

人がいない、と言われれば仕方がない。

寿々菜のように、マネージャーなし、と言うタレントだっているのだから。

そして、当の山崎は・・・

「和彦さん！セリフ、大丈夫ですか！？」

「大丈夫だって」

「何か飲み物は・・・」

「撮影終わってからでいいって」

「汗は・・・」

「かいてない！」

なんとも甲斐甲斐しく和彦の世話をしている。

どうやら、和彦の推理力に惚れ込んだらしいのだが、文字通り「惚れ込んだ」らしく、和彦のマネージャーになれて嬉々としている。

一方の和彦は「危機」としている。

いつもは鈍感な寿々菜も、さすがにこういうことには鼻が利くようで、

既に山崎を目の仇にされていて、現に今も鋭い目つきで山崎を見ている。

死に化粧をしている為、迫力倍増だ。

しかし山崎はどこ吹く風。

撮影開始ギリギリまで和彦にくつついているつものようだ。

閉口している和彦を見て、武上は「ざまあみろ」と小さく笑った。

「シーン54、行きます！」

スタジオにスタッフの声が響き渡り、ようやく山崎も和彦から離れる。

所定の位置に着いた和彦は既に「御園英志」の顔だ。

よくまあ、こんなサツと変わるもんだ。

と、武上は感心するやら呆れるやら。

一方の寿々菜も、ソファアの上で見事な（？）死につぶり。
演技力がない訳ではないのだが、寿々菜が脚光を浴びるのはまだまだ先のようだ。

頑張っているのだから、早く人気が出て欲しい。

でも、寿々菜さんがトップアイドルなんかになって、自分の手の届かないところに行くのは寂しいな・・・

いや、寿々菜さんは、人気が出たからって変わるような人じゃない！
そうとも！

武上は1人、意味もなく意気込むのだった。

第17話 ライバル？（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました！

タロウは推理小説を読むのが大好きなので、一度チャレンジしてみ
たかったのですが、

いかがだったでしょうか・・・？

「え？こういう考え方もあるんじゃない？」的なご意見はあるかと
思います、

どうかご容赦ください（汗）

そして懲りずに第2弾を準備中です。

さあ、どこまで続くことやら。

頑張れ、寿々菜。

頑張れ、タロウ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7191j/>

アイドル探偵 1 「気のきいた殺人」編

2010年10月9日14時41分発行